



Title	Communication-Design 12 全文
Author(s)	
Citation	Communication-Design. 2015, 12
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/53846
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

目次

【実践報告】

- 釜ヶ崎プロジェクト「バザールの知の創発」実践報告…………… 1
宮本友介（大阪大学コミュニケーションデザイン・センター：CSCD）
西川勝（大阪大学 CSCD）

【研究ノート】

- “ゆとり”を生み出す哲学カフェ——鳥取県倉吉市での地域交流の場から—— …… 11
佐藤光友（鳥取短期大学、大阪大学コミュニケーションデザイン・センター：CSCD）

- 健康教育における〈健康認識の個人化〉をうながす実践について…………… 23
徐淑子（新潟県立看護大学）
池田光穂（大阪大学コミュニケーションデザイン・センター：CSCD）

- ハンセン病と短歌：映画〈小島の春〉をめぐって…………… 39
松岡秀明（大阪大学コミュニケーションデザイン・センター：CSCD）

Epicurean Children:

- On interaction and “communication” between experimental animals and
laboratory scientists …………… 53
Mitsuho Ikeda and Michael Berthin
（Center for the Study of Communication-Design: CSCD, Osaka University）

- 投稿規程…………… 76

釜ヶ崎プロジェクト「バザールの知の創発」実践報告

宮本友介（大阪大学コミュニケーションデザイン・センター：CSCD）

西川勝（大阪大学CSCD）

Practical report on the project “Emergence of Bazaar Knowledge”

Yusuke Miyamoto (Center for the Study of Communication-Design: CSCD, Osaka University)
Masaru Nishikawa (CSCD, Osaka University)

「科学知」と「生活知」はこれまで互いに対比的に、二元論的に扱われてきた。しかし、日常生活の中に科学が融け込んだ今日、われわれが直面する問題を解決するには、両者の融合が求められるのではないだろうか。本稿では、この融合の実現に向けた取り組みとして、釜ヶ崎「哲学の会」とそれに関連する実践について報告する。

We often contrast “knowledge” with “experience.” This dualism, however, should be overcome by integration of the both to solve the problems we face in our daily life, where sciences and technologies has been more popular. In this article, as an effort to realise this integration, we report on the practice of “Tetsugaku no kai” in Kamagasaki, the town filled with various lives.

キーワード

伽藍とバザール、創発、しなやかさ

cathedral and bazaar, emergence, resilience

1. はじめに

ソフトウェア開発者のエリック・レイモンドは、ソフトウェア開発コミュニティにおける2つの手法を対比して「伽藍とバザール」と呼んだ。すなわち、伽藍方式とは少数のコアチームによる意思決定を尊重する階層的・中央集権的な手法であり、バザール方式とは多数の参加者の独自性を尊重する分権組織的な手法である。

この対比は、科学知（科学的方法によって得られる客観的あるいは間主観的な知）と生活知（日常生活の中に埋め込まれた経験的な知）にも成り立つのではないだろうか。学術機関はまさに科学知に対する権威であり、伽藍として機能している。一方で、市井に生きる人々の生活知は、多様な価値観の中で持ち寄られたバザールの知である。ただし、伽藍とバザールは対比され得るものであっても、対立するものではない。いかにして両者の「止揚」を図るかということが、われわれの大きな課題であるといえよう。

これに対する一つの試みとして、近年わが国では「伽藍の知」のアウトリーチ活動がおこ

なわれるようになってきた。しかし、われわれ「伽藍の僧侶」は必然的に伽藍の中の文脈に縛られてしまい、「バザールの知」については、その文脈に射影された部分のみしか共有するすることができないのである。こうした束縛から逃れるには、生活知、すなわちバザールの知の創発の「現場」に飛び込むより他の手段はない。本稿では、さまざまな「バザールの知」にあふれた釜ヶ崎での「哲学の会」活動について報告する。

2. 「釜ヶ崎」とはどのような街か

現在「釜ヶ崎」と呼ばれている地域は、大阪市西成区の北東部、萩之茶屋・山王・太子地区周辺の面積にして約0.62km²の区域にあたる（図1）。かつて釜ヶ崎とは西成郡今宮村の字であったが、明治・大正期の区画整理により既に地図上の地名としては存在しない。行政的には、（後述の「第一次釜ヶ崎暴動」を受けて）1966年に大阪府・市・府警で構成される協議会によりほぼ同一の地域を指して「あいりん地区」と命名され、公式的な呼称としては専らそちらが使用されている。しかし、現在でもそこに暮らす人々はある種の愛着、あるいは名称変更によって何らかの問題が解決したかのように扱われることに対する批判を込めて「釜ヶ崎」と呼ぶことが多く¹⁾、本稿でもこの呼称を用いることとする。まずは、「釜ヶ崎」というまちがどのように形成されてきたかについて振り返っておきたい。



図1 太子交差点から阿倍野ハルカスを見上げて

2.1 スラム・クリアランスとドヤ街としての「釜ヶ崎」の形成

江戸時代の釜ヶ崎は、大坂七墓に数えられる鳶田墓地とそれに併設された刑場が置かれ、あとはただ農地が広がる地域だった。ドヤ街としての釜ヶ崎の形成には、現在の日本橋筋にあたる名護町あるいは長町と呼ばれた地域と、大阪市の市域拡張の過程が大きく影響している。

名護町は紀州街道沿いの宿場街として栄えたが、出稼ぎ労働者等の需要に応じて木賃宿²⁾が提供されるようになり、次第に貧民が流入することでスラム街が形成されていった。明治期に入り、コレラ流行への対策と治安を改善する思惑から、行政による名護町の不良住宅の撤去が幾度か計画され、住民移転先の反対運動により頓挫していたが、公衆衛生の改善を名目として1886年（明治19年）に大阪府令「長屋建築取締規則」および「宿屋取締規則」が制定された。1891年（明治24年）には「長屋建築取締規則」が名護町に適用され、基準に満たない不潔家屋は撤去、約1万に上る住民を名護町から立ち退かせるという大規模なスラム・クリアランスが実施された。また、1898年（明治31年）には「宿屋取締規則」が改正され、大阪市内³⁾での木賃宿の営業が禁止されたことにより、木賃宿は移転もしくは業態の変更を余儀なくされた。なお、この改正の前年である1897年（明治30年）には大阪市の第一次市域拡張により、今宮村の大阪鉄道（現在のJR関西線）線路以北部分が大阪市に編入され、残存部分が木津村の一部と統合されて新たな今宮村となった⁴⁾。釜ヶ崎が、この新・今宮村の北部、大阪市に隣接する部分であったことも、その形成に重要な要因となったと言えるだろう。

さらに、1903年（明治36年）に現在の天王寺公園および新世界周辺を会場として開催された第五回内国勸業博覧会⁵⁾に向けて実施された道路拡幅工事の際にも、名護町は景観上の問題として取り沙汰されている。ただし加藤（2002）によると、この際に名護町の大通りでのいわゆる「軒切り」がおこなわれた記録はあるが、実質的な部分である裏長屋までが撤去対象とされた記録はなく、むしろ貧民街の移動にはその後続く鉄道の開通や警察の介入（破落戸・浮浪者狩り）の影響が無視できないことを指摘している。いずれにしても、こうしたスラム・クリアランスを契機として、大阪市内から排除された「名護町」が、当時は大阪市に隣接する地域であった西成郡・今宮周辺に流入し、新たな木賃宿・ドヤの街としての「釜ヶ崎」が形成されていった。

2.2 労働市場（寄場）としての「釜ヶ崎」

名護町の頃から、木賃宿には大坂の産業に合わせて油絞・米搗・酒造といった力役（肉体労働）に従事するため、各地から出稼ぎ労働者が流入していた。というよりも、こうした労働力を集中管理するために名護町という木賃宿街が形成された、という方が正確だろう。産業の移り変わりとともに主な業種の変遷はあるが、釜ヶ崎は労働力の需給バランスをとるための緩衝装置（バッファ）としての役割を果たして来た。

戦後復興期および高度経済成長期には、港湾運輸業・建設業を中心とした労働力需要が高まったこと、また1950年代からのエネルギー革命によって炭鉱が閉山ことにより、釜ヶ崎には仕事を求めて全国から労働者が集まってきた。1960年代後半には、釜ヶ崎は万国博覧会（大阪万博）に向けた労働力を供給する機能を果たし、以後バブル経済期まで流動的労働力を確保するための仕組みとして日雇労働市場＝寄場が確立された。簡易宿泊所は流入する多くの労働者を受け入れるために狭隘なワンルームが主流となった一方で、1961年に起こった「第一次釜ヶ崎暴動」（釜ヶ崎事件）以降⁶⁾、大阪市が「あいりん対策」（住宅地区改良・失業対策・福祉充実によるスラム街解消のための総合的取り組み）として、家族世帯に周辺地域の公営住宅への入居を推進したことにより、釜ヶ崎は单身男性日雇労働者が密集する地域となった。

2.3 貧困の街から福祉の街としての「釜ヶ崎」

1990年代のバブル経済の崩壊以降、釜ヶ崎の寄場としての機能は急激に低下した。背景としては、求人約9割を占める建設業の事業規模縮小とともに、建設工法の機械化・高度化、派遣労働など求人雇用形態の多様化がある。

釜ヶ崎の寄場における「現金」（現金払いで日々雇用する形態）での年間求人数は、1989年度には延べ1,874,507件あった2001年度には656,163件まで下落し、2007年度以降はサブブ



図2 福祉住宅へと変貌した簡易宿泊所前の看板

ライム住宅ローン危機の表面化⁷⁾によってさらに低迷し、2013年度には316,916件にまで落ち込んでいる。また、必ずしも加入率は高くはないと言われるが、日雇労働者数の推移としては日雇労働被保険者数（「白手帳」保持者数）も1986年の24,458人をピークに2009年には2,025人にまで減少しており、1997年以降は過半数が55歳以上と日雇労働者の高齢化も進んでいることがわかる（いずれも西成労働福祉センター調べ）。負傷・疾病をきっかけに休みと、そのまま次の職に就くことができないというケースも多い。

こうした景気後退による失業率の悪化は全国的な問題であったが、流動的な雇用形態である寄場ではその影響が顕著であり、簡易宿泊所にも入ることができない日雇労働者は、路上での生活を余儀なくされた。

このような危機的な事態を受けて、2000年には釜ヶ崎に「臨時夜間緊急避難所」（シェルター）が開設されるなど、大阪市によるいわゆるホームレス対策が進んだ。また、2002年には「ホームレスの自立の支援等に関する特別措置法」（平成14年法律第105号）が制定され、基本方針として「ホームレスに対する生活保護の適用に当たっては、居住地がないことや稼働能力があることのみをもって保護の要件に欠けるものでない」という考え方が示されたため、元来は固定した住居をもたなかった日雇労働者たちにも生活保護制度の適用が進み、一般的な賃貸住宅で定住する人が増加した。その中には、簡易宿泊所から改築したものもあり、生活保護受給者のみを入居対象とし、申請手続きの相談なども引き受ける「福祉住宅」へと姿を変えている（図2）。

生活保護の現状について、全国の保護率が17.0%であるのに対して大阪市全体では55.5%と高い水準であるが、その要因の一つとして釜ヶ崎での高い保護率が挙げられる。大阪市各区の生活保護統計によると、2014年9月時点における西成区の生活保護世帯数は25,586世帯、被生活保護人員は28,166人、保護率は237.9%であり、市内各区の中でも飛び抜けて高い。また、生活保護受給世帯あたり平均人員は1.1であり、単身世帯の割合も市内各区の中で最も高いことがわかる。現在の釜ヶ崎は、かつての労働市場の街から福祉の街へと変容しつつある。

2.4 釜ヶ崎におけるコミュニティの形成

以上のように、近年釜ヶ崎に暮らす人々の中では単身・高齢の生活保護受給者が占める割合が高くなっている。また、日雇労働者として全国各地から流入した経緯より、地域に十分な人間関係の基盤を持たず、コミュニティ活動に参加することも少ない。また、寄場には互いの過去や個人的な事情に踏み込まないという独特の関係規範、いわゆる「不関与規範」⁸⁾があったが、生活保護を受給し定住生活に移行したことにより、仕事の現場や酒場といった流動的な交遊の場から離れ、隣人との固定的な人間関係でトラブルを抱えることを恐れるようになり、かえって社会的に孤立するリスクを高めるといふ矛盾を孕んでいる（石川、

2013)。これに対して、ケースワーカーや介護福祉団体の関与などにより、さまざまな取り組みがおこなわれているが、量的な点で十分に対応が追いついていないのが現状である。

3. 実践

ここでは、2つの取り組みについて報告する。いずれも月に1回の頻度で開催される哲学カフェである。ひとつは、2012年4月より釜ヶ崎の中心にある西成市民館で主に実施している「釜ヶ崎 哲学の会」であり、毎回一つのテーマ（表1）について2時間程度、脱線しながら語り合う。もうひとつは、2013年7月より西成区からの委託事業である「単身高齢生活保護受給者の社会的つながりづくり事業」（通称：ひと花プロジェクト）の中で、表現プログラムの一環として実施している「アジール呱呱の声」である。

釜ヶ崎での哲学カフェの開催については、単身高齢者の居場所としての需要と、伽藍的・権威的な知を前面に持ち出さなくてもよいといった点がうまく結びついている。いずれの場でも、基本的なルールとして以下のことを提示している：①自己紹介は不要、②発言は「義務」ではない、③語るときは自分の経験（言葉）で、④他者の発言は遮断せずに最後まで聞く。この単純なルールは、「不関与規範」を根底とした釜ヶ崎独自の関係性の中で、過度に自己開示を要求せず、また単なる論争に終始しないために重大な役割を果たしている。

参加者には、回を重ねるごとに「常連」が増えてくるが、時折ふらっと参加してくれる人もいる。常連メンバーの間には従来の釜ヶ崎的「不関与規範」とは異なる形で、新たな連帯が生まれているように感じられる。とりわけ過去の話聞き出そうとすることはないが、自然な形で参加者自らの豊かな人生経験談が語られることがある。無論、明るい話ばかりではないが、いままで釜ヶ崎では語られることのなかったそれぞれの「過去」が共有される瞬間

表1 「哲学の会」のテーマ（第1回から第24回まで）

01：幸せについて考える	13：鬱
02：遊び心について語る	14：美しい
03：色について	15：自尊心
04：自分とは	16：余裕
05：安らぎ	17：火
06：親しみ	18：水
07：死	19：風
08：自由	20：土
09：愛	21：レジリエンス
10：生きるとは何か	22：他人
11：賭け	23：家族
12：次元	24：自分

がある。

参考までに一例を引用してみよう。表2, 3は、「アジール呱呱の声」（2013年7月16日）で交わされた対話の一部を抜粋したものである。単身高齢生活保護受給者が主な参加者であるが、とくにテーマとして設定したわけではないのにも拘わらず、生活保護を受給するに至った経緯や、その際の逡巡、これからの希望や不安について、赤裸に語られる場面があった。また、働くことへの高い意欲や、社会の役に立ちたいという思い、過去の仕事に対する誇り、若い世代への励ましなど、彼らの中では、単にステロタイプ的な「お互いに触れてはならない暗い過去」だけではなく、共有され得る、あるいは共有したいものがあるのだということを感じさせられた。

「哲学の会」の今後の展開としては、参加者の中から新たな試みとして、芸術創作を主題とした「楽描きの会」が2014年4月より発足した。言葉のコミュニケーションに依るのみならず、今後こうした身体的・芸術的コミュニケーションも取り入れながら、釜ヶ崎における「パズル的な知」の創発を継続していきたい。

表2 「生活保護について」の対話

F：僕らの場合、(人生の) 楽しみのエリアが小さいからね。遊ぶにしても体はついてこない、お金は続かない。そうすると、行きたいなと思っても我慢しますわ。今日は良かったな一って思えることは無くなってきますよね、必然的に。

A：どんなことが一番、無くなってきたんですか？

F：うーん、そうですね…。一番というのは、生活保護を受けるようになったときですね、僕自身では。最後の扉を開けてしまったな、という気持ちはあったんですね。これから先、開ける扉があるんなら、もう死ぬ時だけやって。そういう感覚になってしまったことかな。もう他に新しい仕事してどうのこうのっていう気持ちも無くなるし、開ける扉のない部屋に入ってしまったなという気があったんです、生活保護を受給するようになったときに。それまでには、まだ生活保護を受けるような身勝手なこと考えてたらあかんっていう気持ちがあって…。手続きしてなかったんですね。で、もうとことんダメになって、生活保護の手続きをしたときに、僕はそういう考えになりましたね。

A：誰かに言われたりしましたか？そういう「最後の扉ですよ」って…。

F：いやいや、人からは言われたことはない。いままでずっと、2年半くらいホームレスしてて、職務質問なんかされたときに、ある時、警察官の人が、なぜ(生活保護を) 受けないのですかという話をして。だけど僕は、自分勝手な生き方で生きてきて…。まあ、月2万くらいありましたから、なんとか食べていけると。体の動くうちは申請する気はないんです、という話はしたんですけど。考え過ぎやと言われてたら考え過ぎなんでしょうけど、一本のその線があったから生きてるってね。

A：そこからいろんな楽しみが消えていったんですか？

F：そうですね。もう、先に夢をみないと、勝手に決めましたね、できないって。やる以上は、生活保護を受けてたら悪い、何かするにあたってね。仕事をするにあたって、僕ら行ったら、1万5千円、6千円もらってましたよね。ちょっと働けば、(生活保護を) 切られるんじゃないかと。そうなるとその仕事が続くという保証もありませんし、体力が続くかどうか分かりません。そうなる困る、それじゃやめとこかという形になるんですね。ですから、僕らが偉そうにいうたら悪いですけど、働いて、それを申請して、生活保護ですね、それを一回受け取って、たとえば誰もいない時だったら弔電にす

るとか、お骨をもらいにこられる方の旅費にするとかいった形をとって預かってもらったら、少しは考え方が変わるんじゃないですかね。

A：自分で自分の稼ぎをしっかり持っているときには、いろんな夢も持てるし、可能性みたいなのも考えられるし、いろんなことで楽しんでいられるけど、それが無いのに思えるか、どうですかね。

C：63、4歳くらいまで普通に仕事できたんですけど、ある時、64歳くらいから、一気に体力が落ちてきて、体がしんどくなってしまい、いままでやってたことができなくなってきた。で、私、ちょっと蒸発してきた人間なんですけどね、30歳くらいで蒸発して、10年くらい神戸港の方で港の仕事をしとって、いろいろ資格とるのに身分保証が要るけど取れないものだから、西成へ逃げてきて、乞食か、20年くらいかな、日雇い仕事して、63歳くらいまでできてたんですよ。お金をちょっと受け取って、後のことなんか全然考えてなかったね。働けなくなったらどうしよう、なんて。

A：まあ、僕も考えてませんけどねえ…。(笑)

C：65歳になったら、なんにも仕事に行かれへんし…。困ったなあ。ちょうどそのころ、65歳を過ぎた人は申請すればくれると。それまでは、わしらのときは大変でした。いろいろ証明もって行って。職安も10回以上通ってね、あちこち全部落とされて、血圧が高くて持病だから。それで、なんとか生活保護をもらえるようになって。で、おっしゃったようにね、生活保護もらって恥ずかしいとか深く考える余裕なくて助かったなあ、と。その後ですね、自分の楽しみが無くなるなんてことなかったですね。いろいろ生活を切り詰めて、例えば340円の週刊誌はあそこ行ったら50円で買えるとか。そしたら結構余裕が出てくるものですね。ですから、いろいろテリトリーが増える、カメラ買ったりとか。自分で楽しみを見つけられます、いろんな不安もいっぱいありますけどね。

A：保証がないということと、楽しみがないということが、一緒にはなっていないかと。

C：せっかく生活保護もらって遊ばしてもらってるんだから、なんかボランティアとか、鳥澁がましければ、人の役に立つことをしたいなと思うてはいるんです。

A：まあ(私も)同じような考え方ですね。別に自分の金にするために働くんじゃないかと…。

C：うん、人のためになって、お金にできたらいいんだけどね。

A：(Gさんに)今の楽しみはありますか？

D：…ボランティアやったり…。それからもうかなわんもんやけど、ビールくれたり飲み物もうれしいな。(笑)

(A：進行役、B、C、D、E、F：単身高齢生活保護受給者、G：20代の男性)

表3 「仕事について」の対話

A：やっぱり仕事っていうのは、結構楽しみの根っこにあるのかな？

B：仕事っていうのは、やっぱりありますね。うん、楽しい。俺、去年の9月まで、72歳までやとったもんね。「もう、やめとけ、やめとけ」言われたけど。面白い。でも考えることと体がついていかないとけない。俺、いままで習ったこと頭に入っているけども、これがね、体がついていかない。教えることは教えるけども、若い子とかね。

G：今、居酒屋でバイトしてるんですけど、夕方5時から4時までで…大きい声出して今日も声が枯れているんですが。自分はボランティア活動とかアートを使ったワークショップにも興味があって、いまちょっとずつ、活動し始めているんですけど、仕事をしてるとそっちに力が注げないなというのがあって、辞めたいなとかなっているんです。仕事が楽しいというふうには、イマイチ思えていない…。

E：これっっちゃう、飯食うのも忘れるほど惚れ込む仕事はまだ見つかってないんやな。

B：まだ、これからや、ね。まだこれから、勉強やと思ってる…。

C：継続してね、嫌なことでも、ずーと一つのことを続けてやってたら、50、60になって、この仕事やっとなって良かったな、誰にもこの仕事やったら負けん、そうなったら楽しくなるわ。

F：そうですね、何事も一生懸命やるのがいいんじゃないですか。勉強も仕事も遊びも、悪さも。すべて一生懸命やらない人間て面白くないんとちゃいますか。僕ら若い頃そうやって生きてきましたもん。

C：わしら若い頃ね、選んどられんかったもん。何でもやらないあかんかった。今みたいに、何でもある時代じゃなかった。好きなことやれたら一番だと思うけどね。

E：そら仕事に惚れてほしい。

F：僕なんか、鉄ばかりいじって40何年…鉄骨とか造船とか…。鉄は人間と違って、叩いても、穴開けても痛いと言わない。この鉄板とこの鉄板を溶接すると言うても、「この鉄板とくつつくのイヤヤ」なんて言わない。人間は言いますからね。あの子はイヤヤとか…。

A：あー、言いますよね。一緒になつたくせに「イヤヤ」言いますもんね。

F：そうそう（笑）。僕らの場合は、もの言わない物とずっと40年以上…。一番最初に建てたビルが、桜橋の南西側にある東洋ビル。それが、銘板みたら昭和40年ってなりましたからね。

A：そういう仕事はまだ、いまでも行けば見れるわけなんですね。

F：うん、僕の場合はね、20年近く、国鉄の時代から、JRの仕事してきましたんで。電車で走ると、この駅もやったなあ、このホームもやったなあっていうのが出てくるんです。それが楽しいんですね。

(A：進行役、B、C、D、E、F：単身高齢生活保護受給者、G：20代の男性)

注

- 1) 他の地域へ働きに出る日雇労働者の間では「ニシナリ」や寄場があった「霞町」といった呼称が用いられることも多いという。これは地域外から参照するときの利便性を反映しているものと考えられる。
- 2) 木賃宿とは、食事が提供される旅籠とは対照的に自炊を基本とし、日ごとに薪代（燃料費）としての「木賃」を支払うことで宿泊できる簡素な宿のことであり、簡易宿泊所（ドヤ）の原型とも言える。実質的には、一時的に宿泊する施設というよりも、長期滞在を前提として日ぎめで家賃を支払う賃貸住宅・長屋の形態が一般的になっていた。
- 3) 変更点として「第32条 木賃宿ハ大阪市、堺市（並松町ヲ除ク）ニ於イテ営業スルコトヲユルサズ」という条文が追加された。
- 4) ちなみに、釜ヶ崎を含めた新・今宮町が西成区の一部として大阪市の編入されるのは1925年（大正14年）の第二次市域拡張の際である。それに先立つ1922年（大正12年）4月には、今宮町内の区域変更がおこなわれ、字としての釜ヶ崎は東入船・西入船・甲岸に分割される形で消滅している。
- 5) 内国勸業博覧会は、その名が示すとおり国内の殖産興業を推し進めるために開催された博覧会であるが、第五回内国勸業博覧会では初めて諸外国の出品が認められ、将来の万国

博覧会を意識したものであった。

- 6) 「第一次釜ヶ崎暴動」の前年、1960年には東京・山谷で日雇労働者を中心とした暴動が起こっており、これを機に釜ヶ崎でも民生事業・隣保事業を積極的におこない環境浄化を図ることを目的として西成愛隣会が結成されている。
- 7) 一般には2008年秋の「リーマンショック」を転機として議論されることが多いが、実際にはその前年には建設業に対する投資額の減少が始まっており、事業規模の縮小につながったと考えられる。
- 8) 一般論として確かに釜ヶ崎に住む人々の間にある種の関係規範が存在することは認められるが、これは「聞かれない過去がある」という経験の共有に根ざす部分があり、これを「不関与規範」と呼ぶのはある一側面のみを捉えているのではないかと思われる。この点については今後改めて論じたい。

文献

- 石川 翠 (2013) 「釜ヶ崎における社会的孤立」西川 勝 (編) 「大阪大学コミュニケーションデザイン・センター 高齢社会プロジェクト活動報告書『孤独に応答する孤独 — 釜ヶ崎・アフリカから —』」: 23-31.
- 斎藤 俊輔 (1997) 「釜ヶ崎風土記」葉文館出版.
- 白波瀬 達也 (2013) 「釜ヶ崎における死と弔い」西川 勝 (編) 「大阪大学コミュニケーションデザイン・センター 高齢社会プロジェクト活動報告書『孤独に応答する孤独 — 釜ヶ崎・アフリカから —』」: 34.
- 奈良 由美子・伊勢田 哲治 (2009) 「生活知と科学知」放送大学教育振興会.
- 西川 勝 (2013) 「孤独に応答する孤独」西川 勝 (編) 「大阪大学コミュニケーションデザイン・センター 高齢社会プロジェクト活動報告書『孤独に応答する孤独 — 釜ヶ崎・アフリカから —』」: 34-11.
- Raymond, E (1999) *The Cathedral and the Bazaar*. = (2000) 山形 浩生 (訳) 『伽藍とバザール』 (<http://www.catb.org/~esr/writings/cathedral-bazaar/cathedral-bazaar/>)

“ゆとり”を生み出す哲学カフェ ——鳥取県倉吉市での地域交流の場から——

佐藤光友（鳥取短期大学、大阪大学コミュニケーションデザイン・センター：CSCD）

Café-philosophique which makes ‘Yutori’:

Reporting from the situation of local exchange in Kurayoshi-City, Tottori

Mitsutomo Sato (Tottori College,
Center for the Study of Communication-Design: CSCD, Osaka University)

地域住民と学生あるいは教員が哲学カフェという対話する場所に集うことによって、日常的な営みとしての“ゆとり”を再認識できる機会を与えられたのではないかと考える。その意味でも、哲学カフェという地域住民との交流の場から得ることのできる日常生活の振り返りは、専門性に偏りがちな高等教育における教員や学生への反省を促す契機となる。それとともに、地域に密着した哲学カフェの開催によって、地域住民との相互理解を深め、学生の何らかのコミュニケーション能力を向上させるきっかけとなることが期待できるであろう。

キーワード

地域交流、哲学カフェ、ゆとり

Local Exchange, Café-Philosophique, Yutori

1. はじめに

哲学カフェの開催は、今や、日本でも多くの地域で行われている。日ごろ、学生たちにとって、大学以外の場所で、あるテーマに沿って話し合う機会はあまり多くはない。学生の状況をみると、地域のイベントに参加することはあっても、地域の人々とじっくりと話す機会に恵まれているとは言いがたい。地域住民の方々にとっても、日々の日常生活の中で、若者世代と、ある一定のテーマから議論するといったことは少ないであろう。主催者である論者自身も、自分の専門分野以外で熱く議論を戦わせることはあっても、とかく研究室にこもりがちである。研究室という洞窟から抜け出て哲学カフェに趣くことは、地域での語らいの重要性を再認識するチャンスとなるのである。

また、哲学カフェというコミュニケーションの場所は、お互いがただ単に意見交換することで終始するものではない。相手が真意として伝えようとしている事柄を粘り強く傾聴する姿勢を学生に培う語らいの場であり、住民と学生相互の関係性が継続的に発展していく可能性を持っている。

主催者は、鳥取県倉吉市の地を、地域の住民と学生との交流の場として選び、そこで哲学カフェの開催を計画した。

今回〔2014年9月〕の哲学カフェに集った計9名は、市民4名、学生2名、大学教員3名という構成であった。哲学カフェのファシリテーター（進行役）を論者が担当した。ちなみに、哲学カフェのテーマ「〈ゆとり〉って何？」は、長らく佐世保の地で哲学カフェを開催していた川瀬雅也氏から提供していただいたものである。

“ゆとり”についての議論は3時間に及んだため、テープ起こしをした発言を編集し、休憩前の80分間を第一部、休憩後を第二部として整理した。以下、実践記録（紙面の上限により、部分的に削除しているところがある）を垣間見ることから、“ゆとり”についての会話の進行をたどることで、“ゆとり”とは何であるのかについて考えを深めてみたい。

2. てつがくカフェ 記録をもとに

2.1 開始前

哲学カフェ（みなさんには「哲学」という漢字ではなく、「てつがく」という平仮名で明記したチラシやポスターを配っていた）の進行は、まず、カフェを開催するにあたり、山陰地域、特に、鳥取県倉吉市で、記憶の限りでは、哲学カフェが初めて催されることと、この哲学カフェの開催は、地域の住民あるいは市民と学生との交流を話し合う中で深めてもらおうとしたものであることを説明した。そして、そもそも、哲学カフェというものが、20年ほど前にフランスではじまり、高尚な哲学的議論ではなく、たまたまカフェに集う人たちの中に哲学者がいて、それが深みのある議論へと展開したことから、そう呼ばれるようになったことをファシリテーターが解説をして、哲学カフェの幕は切って落とされた。その後、哲学カフェを行う前の確認事として、単なるおしゃべりの場ではなく、進行役が行われるものであることと、「人の話は最後まで聞こう」、「ここでは立場を忘れて」といったルールが確認された。それから、佐藤が、今回のテーマ「〈ゆとり〉って何？」ということについてのコメントを読み上げ、議論の取っ掛かりとした。読み上げられた文章は以下に示している。

「〈ゆとり〉って何？」

教育の世界は「ゆとり」に揺れています。「詰め込みすぎ」と言われ始まった「ゆとり教育」が、今度は「学力低下」ということで廃止になりました。ゆとりのある教育は、学力向上につながるのでしょうか？ 社会も同じことです。現代社会では成果ばかりが求められ、ゆとりのない社会だと言われますが、やはり、ゆとりと成果は結びつかないのでしょうか。

そもそも「ゆとり」とは何でしょう。暇、退屈、余裕、遊びなど似た言葉はありますが、

「ゆとり」には独特のニュアンスがあるように思います。「現代社会は〈ゆとり〉を失った」と言う時、具体的には、私たちは何を失ったのでしょうか。「ゆとり」を回復するにはどうすればいいのでしょうか。「ゆとり」を得ることで、私たちは何を得て、また、何を失うのでしょうか？

答への望めそうにないこんなテーマについて、みなさんでつらつらと話しあってみましょう。「ゆとり」をもって…。

以上

2.2 第一部

詰め込み教育に対する対義語としての“ゆとり”からスタート。話は、ゆとり教育から日常的な、ふとした空き時間で感じる“ゆとり”など当初参加者が思い描いていた“ゆとり”の考えが展開されていく。最初はぎこちなく発言は控えめであったが、次第に熱弁が繰り広げられるようになった。

Aさん：僕が認識している“ゆとり”というのは、詰め込み教育に対する対義語としての“ゆとり”という意味を真っ先に思い浮かべます。でも、結局、“ゆとり”って学力に変換されるものなのか疑問に思うし、単純にこれはずして考えてみれば、学生でない身分から考えると時間的な余裕なのか、社会人にとっては、時間的な余裕ってなんだろうと考えると、ちょっと難しくなるなと思う。

Bさん：もともと、ゆとり教育と言ったときに、おそらく学力が下がることは予想されてなかったと思います。もっといえば、学力が低下してきたのは、時代の流れや社会全体に価値観が多様化していった風潮、子どもたちがあまり勉強ばかりではなくて、もっといろんなことをするようになって学力が低下したのかもしれないですし、学力が低下したって、直接は結びつかないんじゃないかなと思うんです。“ゆとり”ってというのは、誰もが大事なことだなというのは感じている。できれば“ゆとり”がある生活、人生にしたいと思うけれども、なかなか“ゆとり”って何と真正面から考えると難しいと思います。今日も来るときに“ゆとり”ってなんだろうと考えながら来ました。類義語の余裕だとか暇だとかありますが、それとはまたちょっと違うのかなと思います。

Cさん：私いま、汽車で通っています。ずっと、車で通っていましたが、職場がかわって。そこで“ゆとり”に気づきました。汽車で通う、バスで通うというのは、完全にあなたの任せの時間の中に身を置くことになるんですね。…その時間をただ、ぼーっとしているんですが、そうして見えてきたことが、すごく嬉しい。朝、緑の庭園が見えるんですね。毎日そこを通過していたのに、車を運転しているときには少しも見えなかった。見ていたんだろうけれども見ていなかった自分に気づいて、すごく嬉しいし、それがすごくいい時間に思え

る。でも周りの高校生たちは大抵携帯で何かしている。なんで景色を見たり楽しまないのか、なぜその時間まで何かをしないといけないと自分を焦らせるのか、と思えてきて。つかの間の時間も何かに駆り立てられる生き方をして、何かをしていない時間を罪悪のように思い始めているんじゃないでしょうか。何もしていない時間の方がものすごく意味がある。それが、私の“ゆとり”の定義といえば定義です。

“ゆとり”って時間的な余裕のことなのか、それとも、何もしない時間を楽しいと感じる心の余裕のことなのだろうか、参加者の具体的な経験や感情をもとに“ゆとり”の考え方が語られた。ここで、“ゆとり”とは楽しいもの、幸せにつながるものなのか、それとも、罪悪や恐怖、悪いものなのか、という疑問が提示され、議論は“ゆとり”の感じ方へと展開されていく。

Aさん：僕は罪悪っていうのは、人間って二通りあって、“ゆとり”って一つのものだと思います。でも、個人と社会という側面があって、個人が個人として完結しても構わないんですけども、社会的には、最終的には何かに変換されないと結局だめなんじゃないかと考えている。これは“ゆとり”が学力だったり、お金だったり、何かしらに繋がってないとだめなんだよって社会は見ると思うんですよ。

Dさん：本当は“ゆとり”を私もいっぱい持っていますけど、家で寝ていたら、ただの怠けものとしか見てくれないし、結果をつくらんと人って評価してくれないから。「あ、この人って怠けものだ」とか思われるだけなので、そこで自分が苦しくなったら罪悪感を覚えるというか、それでも「私は平気ですよ」と言える人かどうか。それって、ハワイのビーチとかだったら、日光浴しながら本読んでいても私は平気よと言ってられるけれども、日本のそのへんの白兔海岸でそうしてたら、「ばっかじゃないのあの人」という人がいるし、その違いだと思います。

Aさん：何かに変換しなければダメなんだっていうことが悪いことのように言っちゃったかもしれないですけど、本当に時間的にも余裕があって、本当にリフレッシュしていると、これも悪いように受け取られることがある。労働の生産力が上がるというふうには、結局は、ずうっと“ゆとり”という場面ではない。ある程度管理されているから“ゆとり”を感じられるのであって、“ゆとり”だけだったら“ゆとり”は感じられないですよ。外国がいつている“ゆとり”と、日本人がいつている“ゆとり”の違いっていうのは、生活様式や文化的なものであって、日本人が感じているのは、忙しいなかの“ゆとり”であって、外国の方がいつているのは、単なる計画的な様態のような気がします。たぶん、違うんだなあという気がします。同じものではないような気がします。

Eさん：私ね、こういうところへこれるのも、“ゆとり”だと思って。ここへ来るためにい

ろんなことをやって、私“ゆとり”っていうのはね幸せだと思っています。

佐藤：“ゆとり”っていう言葉自身はあまりネガティブな意味合いがないのではないか。それが日本にいる私たちのなんかあの、暇っていうとすごくネガティブな意味合いがあるのではないか。今暇やねんという時間的には余裕があるはずなんだけれども、暇やったら何かしなければいけない、さっきの労働観みたいなんですよ。ね。“ゆとり”と暇というのをどう捉えているのか。

Bさん：先ほど車に乗ってくるときに、“ゆとり”ってなんだろうと考えながら来たと言いましたけど、たまたま信号があって、子どもが横断歩道を渡っていきました。子どもって車の状況もあんまり見ずに、さあっと渡るんですけどね。あれは“ゆとり”がないなあと思ったんです。大人になると、青信号だな、車の音がするしない、ここは車通りが多い、少ないとか、そういう全体の状況がわかるから“ゆとり”を持って横断歩道を渡ると思うんですね。“ゆとり”っていうのは、いろんなことがわかっている状態、自分の状況がわかっている状態に生まれるもので、反対に言えば、“ゆとり”がないのは、わからなかったり、自分の視野が狭かったりするときに、“ゆとり”がないんじゃないかなあっていうことを思いました。今、暇と“ゆとり”っていうことで出てきたんですけども、暇っていうのは、何もしないことかなあと思っています。“ゆとり”っていうのは、何かをしながら、ちょっと隙間というか余裕といいますかがあるという状態。自分が何かするとき100%力を出し切るのではなくて、80%ぐらいで何かすることを指すのかなあ、と今思ったりしています。それで“ゆとり”っていうのは、私が思うのはプラスイメージがほとんどかなあと思います。暇っていうのは、マイナスイメージもあったり、プラスの場合も、肯定的に捉える場合ももちろんあるかなあと思います。

Aさん：暇っていうのは、外的要因、自分の外的な要因を捉えているのだと思うし、“ゆとり”っていうのは、自分の内面的な言葉を含んでいるものだと思う。暇っていうのは、何とすることがない状態なんで、“ゆとり”っていうのは、何かしてても、自分の内面的な部分に対して持っているものではないかなあというふうには思います。

Bさん：(Eさんに向かって)先ほど、午前中にすべて片付けてこられたと言っていましたね。

Eさん：今日に向かって、今日絶対やらなきゃいけないことがあったのでいろいろと、それを昨日したり、朝早くちょっと片付けたりして、絶対ここに来たいと思ったんですね。私はね、二人の親が介護とかで時間的に“ゆとり”もなかったんです。病人のお世話とかいろいろで、身体も壊して、しまいには主人も亡くして、そういうときに、こういう講座とかを見つけて、私行きたいと思ってそれに向かって何が何でも時間を作っちゃうんですね。また行って幸せだと思ったり、お金のことだって、こうやって暮らしていけるというのも“ゆとり”があって幸せと思ったり、暇という似たようでちょっと違うと思うんです。周囲の人は、暇があるからそういうことができるのか、という人もおられるけど、暇をつくらなきゃ

あ、できないときもあるんですよ。

Cさん：暇って結局イコール時間があるということなんですか。

Eさん：だけど、何もしていない人のことを言っとんなることもあるんです。そういうことを言う人というのは、何か仕事をしておられる農家の方とか。

佐藤：暇っていうのは、退屈な時間っていうことですよ。

Cさん：退屈っていう言葉もあまりいい印象がない言葉ですよ。でも、退屈するって、けっこう、どっかこう、精神的にほっとするっていう何かそんな感じもありますよね。

佐藤：すみません。ここでちょっと哲学者の話をしますけれども、ハイデガーという哲学者は、退屈な状態のときでないと、人間の本来の状態が見えてこないというようなことを言っています。

Cさん：退屈ね。私の職場の出勤は9時なんですけれど、8時15分くらいになるんです。その40分間に本を持って行って、図書館の近くなので本を読んでいるんですが、ぼおっとしているときもあるんです。本を読むのも面倒くさくて、でも退屈はしてないんですよ。じゃあ、退屈ってどういうふうにするのか。全然退屈じゃないんです。ぼおっという日差しだなあとか、風が気持ちいいとかしているその時間帯もそれはそれで十分満足しているんですね。じゃあ、退屈ってどういう時間になるんでしょうか。

Aさん：僕は先生がいる前でなんですけれども、おもしろくない授業は退屈です。

Cさん：ああ、言える（笑）ハイハイ。無駄な時間を過ごしているという気分よね。

佐藤：われわれには、耳が痛い。

対話が進むにつれて、参加者同士で自然に会話が交わされるようになった。“ゆとり”や暇、それを感じる状態が、参加者の率直な言葉で語られていき、前半が終了となった。

2.3 第二部

休憩後、まず前半での議論の内容を整理し、ポイントを掻い摘んで説明。その後、佐藤が“ゆとり”の定義づけをするように議論を収束させていくか、もっと多様な“ゆとり”について考えを出していくのか、議論の方向性について提案があった。「まだまとめられる状態にない」という参加者の発言があり、多様な“ゆとり”について語り合う議論が再開された。後半から参加したFさんが口火を切ってスタートする。

Fさん：実は、あの二、三日前だか、アジア大会とかあった。吉田沙織とか錦織とかあの人たちは、ゆとり世代に育った人だそうです。そういう人が、ゆとり世代に育ったために学力が低下して、最近では小学生だと夏休みの少し前から授業をはじめるとか、ゆとり教育をしようというのが失敗だったような感じの発言もあるけれども、一方、ゆとり世代に育った人

たちで、案外、伸び伸びといろんなところで世界一とか、いろんなことをやる人が多いということをテレビで言っていて、そういうもんかなあと私思いました。

Aさん：ゆとり教育世代の特徴として、個性を大事にしているというのがあって、個性的な人たちがたくさん出てきているとは思う。ある種それはいいことでもあるけれども、反面、全部はいいことになってないような気もするんです。というのは、教育、子どもたちの親というものの価値観が多様化したのもありますし、育て方が変わったというのも大きな要因だと思うんですけど、それによって、家庭で育てる部分というのが、比重が多くなった面もあると思うんです。知り合いの子どもが小学生なんですけれども、ちょっと、学級崩壊のような状態になっている。とにかく、授業が全然進まない。それで先生も何もしなくなった。学校じゃあ全然勉強にならないから、家での勉強に賭けようということになって、お金のいるところは塾に行かせる、とすると、もう、家がお金を持っているかないかによって学力が二分することになりますね。やっぱり、教育っていう面だけでみればいい面と悪い面と、集団教育や公教育って、悪い面もあるけど、確かにいい面もあったと思う。それはある種の日本人の特徴でもあったと思いますし、でもこれは外国からみたらだめなところもある、これは文化の差異で、どっちが絶対いいとか絶対悪いとかないはずなんですけど、ある種グローバルスタンダードという感じでみられるというのも、ちょっとおかしな話ではあるなと思う。水やらなきゃ花なんか育たないし、放っておけば育つのかなというところとちょっと違和感があります。難しいのは、社会と学校と家庭、子どもを育てる環境が、以前のようなときでなく、どこで育てるんだというのが変わってきたかなというのは確かにある。

Fさん：おそらく、その日本の教育システムと今言われたことがあると思うんですね。教育のやり方がいままで通りのやり方だと、今言われるような放ったらかしになる可能性はありますよね。

Aさん：そうですね。社会と家庭と学校の全部が変わって行って、価値観や社会全体が変化しているのに、やる方がずっと同じでいこうっていうところに、何か矛盾している。弊害として子どもたちに絶対おかしな部分が出てきているはずだと見ていて、何か絶対悪いとは思わないんですけど、学校って、公教育って、ある種何か一律のやり方みたいな、モデルみたいなものがあって。個性的な人って学校ではつくれるものなのか、家庭なのかっていう。

FさんとAさんを中心にゆとり教育についての議論が展開されていき、進行役が若干やきもきする中、Aさんが“ゆとり”について議論を戻していく。

Aさん：ゆとり教育と、個人がもつ“ゆとり”とはやっぱり違う。個人として考えれば、僕としては、“ゆとり”って、幸福を感じるときであったり、意味づけができるかということだと思うんです。先ほど言われた「ここに来るために頑張ってここに来た」というのは、お

そらく、「やらなければならないこと」と、「やりたいこと」というのはまったく別で、やりたいことを自分で選べるということが一種の幸福みたいなものだと思う。周りからの圧力で仕方なくやっているという状態で、でも自分から選べるんだったら、これは幸福だし、時間的なものがなくても幸福を感じる、忙しくても、でも、幸福を感じるっていう面では、“ゆとり”ってというのは、これに対して意味づけができるかということだと思うんです。例えば、学校だったら学生という役割を演じなければならないし、社会人だったら、サラリーマンだったり、県警だったりして、周りからの関係性の中で役割を与えられて、やらなければならないことも当然持っているけれども、これを社会の役割を全部はがしたときに、立ち止まったときに、自分ってなんだらうって、自分は何のために生きているんだらうって考えたときにちゃんとこれを意味が与えられるかっていうところは、“ゆとり”かなって自分では思っているんですけど。

Cさん：さっき、Dさんがね。何にもしてないっていうことがわりとこの日本の社会ではいい目で見られないとおっしゃって、私も多分、近所にそういう人がいたら、何やっているんだらう、どうやって食べてんの、みたいな感じで多分見るだらうと思うんですね。で、日本の社会で多分、そうやっていく人っていうのは多分ものすごく自分の意志の強さを持ってないと生きていけないだらうなあ、社会での目は“ゆとり”がないというか、許容範囲が狭いんだらうなあと思ったときに、やっぱりそれができる人っていうのは、社会がどう認めたって、自分の強い意志を持っている人なんだって思います。

Dさん：私は、昔から、ちょっと人と外れていると思われる方で、よく言えば、個性的、外国の人からも個性的ねって言われるんです。私は自分で何か変わったことをしている気持ちはまったくないんです。だけど、受ける印象がどうも個性的らしくって。でも、私は、学校で別に、あなたは個性的になりなさいと言われて育てられたわけじゃないし、家でも個性的になりなさいと育てられたわけでもないし、ただ、自分がしたいことをしていたら、思っていることを言ったらそうなっているんです。だから、さっき言っていたけど、個性的な人を育てるのは、家なのか社会なのかではなく、持っているものなんです。私から見たら。もう生まれたときに持っているもの、そういう気質であって、それだけのこと。だから、ただしたいことをしとったら人とズレとるって、変わり者だって言われたらショックを受けるし、個性的だねって言われたら、ちょっと嬉しいし、これだけの違いって感じ。

Cさん：わかります。私もほんと小学校のころから、M子っていう名前なんですけど、Mちゃんは変わってるって言われ続けて育ったから、もう変わってるって言われることに少し慣れっこなんですけれど、でも、何だらう。多様性っていうかね、そういうものももう少し、許容範囲が広くって認めてくれる社会ならやっぱり、もう少し、日本の教育も多分戻れば変わってくるよなあとは思っていますよね。

ゆとり教育や社会制度についての話を交えながら、個人と社会のあり方について話が広がっていった。参加者は、真摯に耳を傾けながら言葉を重ねていく。

Cさん：社会の中で生きるというのは、ある程度何かの基準に合わせないといけないのは当然のことですね。それからはみ出したものがやっぱり、ある意味バツやサンカク付けられるのもしかたのないことで、学校なら学校の規則がある。けども、そこに社会的な余裕というものがあって、それだけじゃないんだよなあって、なんか少しずつ少しずつちょっと変わってきているようには思うんですよね。日本の社会も。

佐藤：それは余裕がでてきたということですか。

Cさん：そうです。そんなにたくさんにはいっぺんには変わらないけれども。現に、例えば、性的マイノリティーっていうんですか、ああいう人たちもちょっとずつ認められて、ちょっとずつ変わるんじゃないかっていう兆しがある気がしている。それは、ある意味では、日本人が一生懸命みんな働いて築き上げてきた今があって、経済的な余裕というものをここまでもってきたから、やっと周りが見えるんじゃないかとは思うんですよね。やっぱり安定している国にいるということから、やっと、じゃあ、ゆとりって何って、自分が思えるわけで、本当にそういう意味では、ある程度確立されたものがある中に合わせなきゃいけないのは、仕方ないと思うんです。そこから、でも、四角い中におんなじ形にいることだけ求めるような社会を作っちゃったら、これからの子どもたちたいへんだし、私たち違うんだよっていうことを子どもたちに繋げていかないといけないんじゃないかな、って思うんですよね。人のせいにしなくて、それぞれが自分の生き方の中で、ちょっとずつ周りを見れるとか、そういう余裕のある人間になって子どもたちに繋げていきたいなあと思います。

Bさん：日本は変わってきてますよね。

Cさん：変わってきてますよ。

Bさん：余裕、ゆとりが少しずつできてきてるかなあと思います。まさに、哲学カフェが倉吉で行われるってことも、余裕ですよ。

後半の哲学カフェの議論ではこの流れも予想していたものではなく、ある一定の結論を出さなければならないとか、一定の方向に向かわなければならないものでもなく、むしろ、どの方向に進むかわからないところに哲学カフェのおもしろみがあるとも言える。ただし、縦横無尽に議論が進むことが必ずしもよいのではなく、ファシリテーター（佐藤）の一定のかじ取りが大切であることは言うまでもない。後半での議論は60分、そして、最後に今回の哲学カフェに参加した感想や意見を伺って幕が閉じられた。

2.4 感想

Eさん：あまり話さなかったですけど。私はともかくここへ来て幸せでした。“ゆとり”っていろいろあるけども、いろんな面でやっぱり幸せに繋がると私は自分で体験しています。今日はありがとうございます。

Bさん：“ゆとり”ってやっぱり、いい言葉じゃないかなあとと思います。“ゆとり”があった方がいいし、そのためには何かやらなきゃいけないことは、やる。そして、時間をつくる。そういった少しやらなきゃいけないことがあって、で、少し何もない、このバランスっていうんですかねえ。何対何が適切なのかはわからないですけども、そういうメリハリっていうか、そういうことが大事なんじゃないかなあと思いました。今日は、こういう場所があって、いろんな方のお話が聞けてとても充実したい“ゆとり”のある時間を持てたと思います。ありがとうございました。

Cさん：私は本当にこんな話を、何かこう盛り上がる時間というのは、ほんとにそういう出会いもなく、とても楽しかったです。最初この哲学カフェって、図書館のロビーで見ました。哲学っていう感じで正直、関係ないかなあと実は思っていたんですけど、何となくちょっとすごい真面目なこと話すの面白いかなあ、どんな人たちが来るんだろうと思って来ました。多分、この哲学カフェっていう名前、とっつきにくいので、何とかのしゃべり場みたいな方がもう少し、いろんな人が来るんじゃないかなあと思わないではないです。もっとたくさんの人に出会えたらもっと楽しい意見が聞けると思います。今日はありがとうございます。

Aさん：今日は議論させていただいて、ホント楽しかったです。僕個人の“ゆとり”に対する考えというのは、すごく理想的に考える気があるので、個人の持つ自由度だと思うんですよ。内面的にも物理的にも時間的にも個人が持つ自由度っていうのが、“ゆとり”なんだと思うんです。個人というのは、家族や友だちだったり、集団、地域、会社、学校、社会というあらゆるものに属していて、あらゆる制約を受けている。その中でも全部個人が振っているのではなくて、その中でも個人の持ちうる自由度っていうのが、“ゆとり”なんだと思うんですけど、ただ、それはもう頭の中で考えている僕の“ゆとり”なんで、Eさんが「今幸せです」といったときに、すごく実感を持って言われたんで、あっ！自分の言葉は実感がなくということを感じて、Eさんの言葉、すごくいいなって、ちょっと、素直に感じてしまいました。ありがとうございます。

Fさん：みなさんと“ゆとり”というテーマでディスカッションして意思交流ができ単調な毎日の中、いい刺激になりました。とって、ためになっていい時間でした。

Gさん：“ゆとり”って何っていうのがテーマのようですが、いろんなことがあると思うんですよ。精神的なこともあれば、経済的なこともある。ただ、その“ゆとり”っていうものを本当にそれを創出しようと思ったら、グローバルに変わらないと、学力だけとか、何だけ

では無理で、全体的にこう変わらないとうまくいかないんだろうなあと思いました。

Dさん：私にとっては、自分が自分のまんまでいてもいいよっていう範囲が“ゆとり”って感じがあって、何かあんまり、社会がどうかっていう大きなことじゃなくて、何か自分が普通に毎日楽しいなあって思える程度に生きていける範囲が“ゆとり”の範囲みたいな、半径何メートルというか、何かそんな感じの空間っていうか、だから、人と人との関係性とか、何かそういう範囲とかで、あっ、この人といっしょにいたら楽しいなあと思えたらそれがその人とその人との自分の“ゆとり”の範囲みたいな、何かまあ、毎日楽しいなあと思えたら、“ゆとり”がある生活かなあって感じですよ。

3. おわりに

まず、反省点としては、決してよい進行役ではなかったことは、記録からも読み取れるであろう。自らの欠点でもあるが、やはり、どこか日常的な事柄から離れて、形而上学的な思考で解釈しようとする傾向が自らにあったことは反省すべき点である。次回、進行役になったときは、みなさんの共通理解が得られる日常的な出来事や場面、日常会話などから話をつなげていかなければならないと感じている。

「“ゆとり”を生み出す哲学カフェ」というタイトルのヒントになったのは、Eさんの一言であった。それは、今回の哲学カフェのテーマ「〈ゆとり〉って何？」についての会話が始まって、しばらく時間が経って、Eさんが「私ね、こういうところへ来れるのも、“ゆとり”だと思って。ここへ来るためにいろんなことをやって、私、“ゆとり”っていうのはね、幸せだと思っています」と初めて語られたその言葉であった。そのことがとても印象的であり、その場のカフェの雰囲気を一変させるほどであった。Eさんは「今日（哲学カフェ開催の日）に向かって、今日絶対やらなきゃいけないことがあったのでいろいろと、それを昨日したり、朝早くちょっと片づけたりして、絶対ここに来たいと思ったんですね…。私行きたいと思ってそれに向かって何が何でも時間を作っちゃうんですね。また行って、幸せだと思っし…」このとき、“ゆとり”というものは、必ずしも余裕があるから出てくるものではないということを改めてこのEさんから教わったような気がする。何か“ゆとり”を感じさせ、幸せな気分になりたい、そのためには時間を作ろう、そのやる気やインセンティブのようなものが自らを突き動かす大切な感情であったということ、このことに今更ながら気づかされたのである。

今年度も残りのカフェの時間もみなさんと真剣に議論し、楽しく過ごすことが、余裕の証であり、地域における哲学カフェの継続と発展を促す原動力（エネルギー）なのである。

健康教育における〈健康認識の個人化〉をうながす実践について

徐淑子（新潟県立看護大学）

池田光穂（大阪大学コミュニケーションデザイン・センター：CSCD）

Practicing “Cognitive Personalization of Health Information” in the Classroom Settings

Sookja Suh (Niigata College of Nursing)

Mitsuho Ikeda (Center for the Study of Communication-Design: CSCD, Osaka University)

この論考は、情報提供型の健康教育プランニングに、コミュニケーション・デザインという発想を導入するための予備的考察である。健康教育の実施者が抱えている〈困難さ〉のひとつに、受講者はそのテーマと内容を「他人事」と捉え、健康情報が十全に伝わらないことがあげられる。この「他人事意識」形成の問題を乗り越えるために、実施者が健康のメッセージをより適切に伝えるための工夫について、(1) 参加型・能動的学習を通じた、(2) 情報の個人化、という2つの観点から筆者らは論じたい。また、その方法について、参加者自身による教室内での相互作用創出と学習プロセスにおける感情体験の意味について事例を紹介する。

This preliminary discussion deals with the possible contribution of “communication design” to elaborating health education planning. The providers of health education often face with the learners’ counter-statement that it’s “not my business”. What can we do with this conventional response and carry health messages appropriately to the target audience? First, the authors examine this question in relevance of (1) active learning and (2) cognitive personalization of health information. And then, it is discussed how to activate the “active learning” process shown a few model works/exercises for the classroom, in regard with the significance of the learners’ commitment to creating classroom interaction and of the emotional experience within the learning process.

キーワード

健康教育、参加型・能動的学習、健康認識の個人化、感情体験

health education, active learning, cognitive personalization of health information, emotional experience

1. はじめに

実施者が抱えている健康教育（health education）の〈困難さ〉のひとつに、テーマとして取り上げる健康問題が、受講者に対して〈他人事のように理解され〉自分のこととして考

えてもらえない、というものがある。受講者から〈他人事という意識〉が払拭されないのはどうしてか？ そして、受講者がしばしば抱く充足感のなさ、たとえば「切迫感のあるテーマでないので真剣に取り組む気もちになれなかった」をいかに軽減するかが、実践上の課題として浮かび上がる。ヘルスコミュニケーション研究における解決が待たれる課題とは、このようなことだ [池田 2012:6-8]。

この論考では、筆者らが手がけた授業を事例にして、健康教育における〈他人事という意識〉を超えて、実施者が伝えたいことを受講者に届けるための工夫について考察する。そして (1) 参加型・能動的学習を通した、(2) 情報の個人化、をより効果的に実現させるのが、重要なポイントとなることを指摘する。また健康情報を、当事者に関わるリアリティのあるものとするための具体的な方策として、闘病記の朗読、学習カルタ作り、あるいは傷病や障害を抱える匿名の当事者たちへの手紙作成といった、一見ありふれた「ワーク」を通して、〈親しみやすくする familiarize〉という情報戦略を図ることの意義について論じる。他方で、これらの事例の経験から、従来の座学 (classroom lecture) を中心とした、一方向性になりがちであった健康教育に、コミュニケーション・デザインという発想を注入し、参加型・能動的学習の可能性について考察する [池田 Online]。

2. 健康教育により発信された情報の個人化

2.1 健康教育はなにを目的とするか

健康教育の第一義的な目的は、適切な保健行動の取り入れとその習慣化を図ることにある [Glanz 2008; 宮坂ら 2007]。健康教育を遂行するための実践者の働きかけには、おおまかに分けると、次の三段階ないしは四段階に整理できるだろう。(1) 知識を増やし、態度形成を促し、動機づけるという「知識・態度の水準」での働きかけ。二番目に (2) 行動を起こしたり行動を増したりする「行動化の水準」での働きかけ。そして、三番目は、(3) 行動を長期間維持し続けること、例えば、体重の減少、検査値の改善など、身体への効果出現など起こる「行動の習慣化と身体的効果出現の水準」での働きかけである。ただし、健康教育の最終ゴールは、そこに留まらない。三番目の変化への働きかけの先には、(4) 個人のみならず、社会の中で効果出現が大規模に起こり、それが社会全体の健康水準の維持向上に寄与することが、期待想定されているからだ。

従って、健康教育において、健康知識 (あるいは疾病知識) の普及は、個別の介入計画の目標となり得るが、それはあくまでも具体的でかつ中間的な目標にすぎない。より広い意味では、健康教育とは、個人の健康に関する知識習得を通して、行動を変容させ、健康行動を確立し維持することのみならず、〈社会全体の健康の達成を可能にする実践の総体〉であ

ると言ってよい。そのため、従来の多くの健康教育で発せられるメッセージや標語には、常に「～しよう」——例えば、適量飲酒にとどめよう、運動を定期的におこなおう、HIV検査を受けよう——というものが見られるのである。しかしながら、これまでの幾多の実践研究では、教育の前後における受講者の知識の残存量や事後の行動変化という解釈枠組をあてはめ、「なぜある健康教育は成功し、なぜあるものは失敗するのか？」という要因探究の次元に留まっており [e.g. Cline 2011:381-393]、「そもそも知識の残存量や行動変化が起こったことを健康教育の成功とみなす、ヘルスコミュニケーション論上の根拠とは何か？」という批判的観点からは考察されてくることがなかった。

2.2 「他人事意識」の源泉

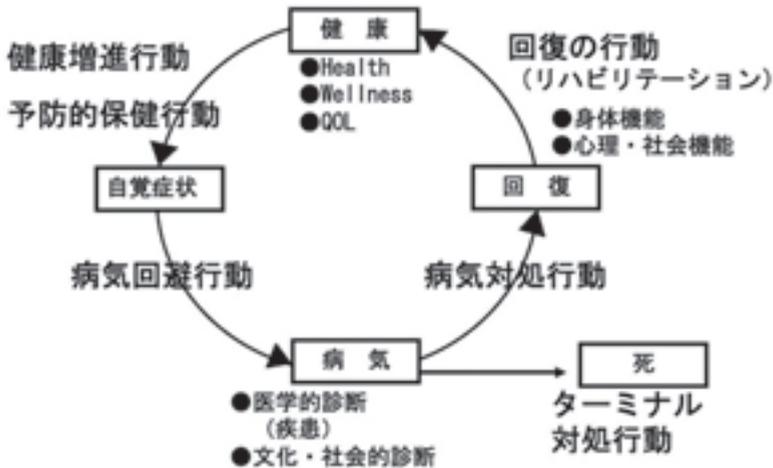
ジェームズ・プロチャスカから [2005 (1995)] は、健康行動における行動が段階的に変化するとして「行動変容段階モデル」(the Process of Change Model) を示した。このモデルは、個人が、健康教育が発信提供する健康メッセージ・健康情報・健康上の指導助言に接してから、推奨される保健行動を生活に取り入れ、そして、習慣化するまでの経過を、心理的準備状況(レディネス)に注目して図式化している(図1)。



図1 行動変容の段階モデル

「行動変容段階モデル」では、保健行動の習慣化のステージとして5つを設定している。すなわち「無関心期」「関心期」「準備期」「実行期」「維持期」であり、この5つのステージが移行して最終レベル「維持期」に到達することを理想としている。最下段は「無関心期」である。「無関心期」にある個人は、勧められた「行動をとることに全く関心がない」。いいかえると、自分に向けられた健康メッセージの受け取り手であることを自覚しない、あるいは、受け取り手になることを拒否しているということである。

健康教育では、予防的保健行動、つまり、特段の症状や健康問題のない人が、将来を見越してとり行う保健行動がとりあげられることが多い（図2）。予防的保健行動を起こすということは、生活時間や労力、経済資源を、将来、起こるかもしれないし、起こらないかもしれない、言い方を変えると、将来の健康状態という〈不確実な出来事に投資する〉ことである。従って、予防的保健行動を起こすか起こさないかの決定には、当然、他の、より時間に切迫したニーズにかかわる生活行動との競合が起こる [宗像 1996 : 106-110]。



宗像, 1996, p.87より徐が改変。

図2 健康-病気サイクルの段階別にみた保健行動

健康教育をとおして健康情報に触れた人が、予防的保健行動の意義を理解しつつも、その行動を起こすという決定をしない場合、認知的不協和の解消という心理的作業を行わなければならない。すなわち、「重要であると分かっているのに、その行動をおこなわない」という矛盾の帳尻合わせのため、将来起こるかもしれない健康上のリスクを過小評価したり、伝えられた健康情報の価値を切り下げたりする。また、健康メッセージの名宛人（=健康教育の当事者）であることを拒否すること、つまり、「その健康問題は自分には関係ない」と無価値化し、否認することは、「無関心期」にある人にしばしば生じている、心理的防衛（あるいは抵抗）として解釈できる。健康教育実施者を嘆息させる「他人事意識」とは、上のような事象の集合であると思われる。この宗像の行動モデルからは、健康人が「他人事意識」のままであることは、健康人が病人としての見方（パースペクティブ）を持たないからであろうことが推測できる。

2.3 情報の個人化

人は、この「他人事意識」をどのように転倒させて、すなわちパースペクティブを移行させて、健康メッセージを「自分の事」として引き受けるようになるのか。ここで、健康教育などを通して届けられた健康情報に基づく認識が、自分自身（life）および自分の生活（life）に意味あるものとして、個人の記憶にとどまることを「健康認識の個人化（cognitive personalization of health information）」と名づけよう。

ヘルスコミュニケーションや情報通信の研究分野では、このことを例えば、健康リスクの「個人化（personalization）」がおりつつあると論じられてきた [e.g. Ferguson 2007]。つまり技術通信技術（ICT）の発達を通して、健康情報の普及するにつれて、一般の人々に情報が伝えられる。と同時に、情報の受け手は健康リスクの認知を多様に形成しており、均質な健康情報を提示しても、それを受け入れる側による様々な修飾をうけて受容される。この問題系は、Becker [1974] が、保健信念モデルにおいて「脆弱性の認知（perceived vulnerability）」を背景要因として概念化して以来、現在にいたるまで、大小多数の研究の流れ（＝学派や流派）を生んできた。

さて、だれが、健康教育の当事者になるかは、疫学研究による年齢・性別・行動傾向・環境などのリスク要因によって、分画される。そして、ターゲット・オーディエンスと名指された人たちに、どのような方法で情報を届けるかは、介入方法論の問題である [池田 2012:7]。

事例やドラマ、シナリオをもちいた教材の活用や [徐ら 2006]、ピア・エデュケーション [東ら 2004] といった、健康教育でよく用いられる方法がある。これらの手法は、健康情報に、等身大の肉付けをほどこし、文字や記号による情報以上の意味をもたせることによって、情報の受け渡しを、より確実に行うことをめざす。情報に人格性を持ち込むことによる社会的学習の応用である [Bandura 1977]。自分と類似点のある他者の経験（ナラティブ）というかたちで、健康情報を加工提供されると、学習者にとっては、その情報を自己の経験と照らしあわせて、すでにもっている情報や態度・信念に統合しやすくなる。この効果をねらうのだ。一方、働きかけの戦略として、いかに心理的抵抗を解除するかに集中する方向がある。抵抗が解除されないかぎりには、情報の受け渡しや認知形成のために働きかけるルートが確立できないからである。これについて特化して発達したのが、動機づけ面接である [Miller and Rollnick 2002]。

3.

健康教育における参加型・能動的学習の効用

3.1 学習者自身による相互作用の創出

情報の個人化をはかるに際して必要な、心理的抵抗の解除と、情報の個人的経験への統合には、参加型・能動的学習が有効である。このことを検討する前に、まず、参加型・能動的学習の特性を、教室内で生じる対人相互作用の観点から確認しよう。

参加型・能動的学習と対比されるのは、一对多の一斉授業形式のなかでの学習活動である。健康教育では、KAPモデル（Knowledge-Attitude-Practice Model）[e.g. Médecins du Monde 2011:4-5] つまり、健康情報の伝達が心身の健康に寄与する態度行動の形成をうながす、という考えにもとづき、情報伝達はその主部をなす。つまり、一般には知られていない科学的情報の「正確な」伝達、情報伝達の「効率性」という観点から、一斉授業（講話、レクチャー）がまず、選択される。

一斉授業での情報発信は、基本的に、実施者（教師）から学習者（生徒・学生、参加者）への一方向性である。また、本時において伝達されるべき情報や、学習者に習得が望まれる知識や技能は、実施者（および実施者がもちいる学習計画）により、あらかじめ、定められている。実施者が、授業の進行を進める役割を積極的にとり、かつ、その時間でやりとりされる情報の、主要な情報源となる。

教室をひとつの相互作用の空間としてみた場合、一斉授業での、相互作用の型は、どちらかというとなら固定である。実施者—学習者という役割構造は安定的であり、行為目標（なにを目的にその場集まっているのか）は明瞭に示されている。

一方、参加型・能動的学習では、学習者みずからが、学習活動の進行に関与・寄与するよう、学習活動が準備計画されている。参加型・能動的学習では、実施者は、「ファシリテーター」として、学習活動プロセスの前景からしりぞく。ファシリテーターの主たる役割は、開始と終わりを告げること、活動をとおしてなにを達成したいかを説明すること、達成したいことについて参加者間の共通認識を形成すること、活動に必要なインストラクションを与えること、最小限の進行管理、時間管理、そして学習場面を破壊するような逸脱をとりのぞくことである。また、一斉授業とは異なり、実施者は、情報の発信者、主たる情報源とはならない。明らかな先導者が存在しない状況で、学習活動を先にすすめて行くためには、学習者は、みずから行動をおこすか、あるいは、相互にリーダーシップをとり、相互作用を起こしていくしかない。つまり、参加型・能動的学習において、学習者は、学習プロセスに関与せざるを得ないのである。与えられた学習テーマ、題材、テキストやその他の教材、他の学習者（つまり生徒同士）、ファシリテーターとしての実施者など、教室内の資源から（「誰か

ら、なにから、どこから)、「なにを」「どこまで学ぶか」ということを、学習者自身が、その学習のコンテキストそのものから選び取る。そのことを通して、学習者は、知識や特定の技能というより、学習活動でなにを行うべきか、いかに行うべきか、自分は何を知っているか、自分は何を知らないか、自分は何のようなきにどのような行動的・心理的反応をするのか、など、自分自身に関する知識と、メタ学習にかかわる技能を学ぶのである。

3.2 ポジティブな感情体験

教室的な空間で、このような「参加せざるを得ない状況」をつくり出す仕組みとして、「ワーク」の活用が適している。ここでいう「ワーク」とは、「きく」「はなす」「かく（書く・描く）」「うごく」といった動作をくみあわせて作業や活動を構成する、学習「素材」である。例えば、与えられた用具や材料を用いてテーマに沿って何かを作るもの、考えや気持ちを言葉以外の手段で表現するもの、考えを言語化して他者と共有するもの、さまざまなやり方でもって意見の交換や受け答えをするもの。これらの活動を、特定の問題を題材（「学習テーマ」）にして展開できるよう、計画配置する。健康に関連したことがらを題材に設定すれば、健康教育となる。活動の単位は、ひとり（学習者単独）で、ペアで、小グループで、学習参加者全体で、のいずれもが考えられる。

すでに上記で指摘したとおり、参加型・能動的学習は、学習における情報伝達の効率性を追求しない性格をもつ。従って、ある健康問題についてのまとまった知識や予防行動について、短時間、例えば年に1回の特別授業で、情報伝達したい・方法を身につけてもらいたい、といった目標を設定した場合には、実施者は、時間のロスが大きいと感じるであろう。

しかし、「まとまった知識群のうち、もっとも重要なものひとつを確実に伝達したい」「とりあげる健康問題の存在を知ってほしい」「その健康問題にもっと関心をもってほしい」、あるいは「個別の健康問題を考えることによって、健康を重視する価値観を強化したい」といったことが、その授業内の到達目標であった場合はどうか。「ワーク」を用いた参加型・能動的学習の、一見むだの多いようなやり方が、逆に、学習者にとって、差し出された健康問題や情報の吟味を十分に行う、時間的かつ認知的な余裕を生む可能性につながる。また、対象者の自由裁量度を増やすという点も重要である。

「ワーク」という、学習活動の進行の多くを学習者自身にゆだねる方法では、用い方次第によっては、実施者が学習者の思考を、思い描いた結論に向かって導いたり、グループ・ダイナミクスを操作しようとしたりして、場面に介入することを少なくすることができる。実施者に、学習活動の進度をこまかく指示・管理されることなく、「自分のペースで」「自分で選んだことば・表現方法で」課題作業をおこなったときの「取り組んだ」感や「よくわかった」感、「自由にできた」感、小グループでの活動をやりおえたとき、ゲーム要素を取り入れた活動などに夢中になったときの「がんばった」「楽しかった」「退屈しなかった」「参加

できた」感は、学習者が感じる「主体的参加」のコアになる感情・情動体験の表現・表明であろう。

こうしたポジティブな感情体験が、次回の健康教育にたいする「レディネス」(readiness, 準備性)を培う。細かい学習内容は、短期間で、ともすれば、学習時間が終了し、教室のそとに一歩出た瞬間にも失われるかもしれない。しかしながら、参加型・能動的学習の「ワーク」で体験した「楽しかった」「自由にできた」「よくわかった」という好ましい感情の記憶が保持されれば、それは、次回の健康教育への期待感となり、次回の健康教育に、みずから意義を認めて・求めて積極的に参加するという内発的動機となり得るのである。もちろんこのような主知主義的理解のほか、情動そのものが知性のレパートリーであるという主張もある [池田 2013]。いずれにしても、授業を構成する要素のなかに情動のダイナミズムを取り入れることは、場面崩壊リスク管理さえ行えば、従来型の上意下達的な健康情報の伝達で生じやすい、心理的抵抗感の解除につながる。健康教育に期待し参加するという内発的動機をもつということは、学習活動のなかでめまぐるしくやりとりされる、健康情報を含む、さまざまな有形無形の情報、伝達経路を開くということに等しいからである。

先に、情報に人格のかたちをあたえることによって、健康情報の受け手である学習者に、代理学習を起こりやすくすることについて言及した。事例やロールプレイを十全に活用できるのも、参加型・能動的学習の形態なのである。また、実施者に与えられる文字や数字からではなく、自分自身や、隣にすわっている学習者が立体的なかたちを与えた情報ならば、形成過程での注察を経て、その学習活動での愛着ある成果として、学習者にとっての有意義な記憶になるのである。

4. ワークの組み立てと実例

4.1 参加型・能動的学習への「参入障壁」

参加型・能動的学習において、上に説明したような肯定的な感情体験を、ある程度の確度をもって生じさせ、学習者の心理的抵抗を解除するような相互作用を創出するには、学習活動を計画する実施者に力量・経験があることに越したことはない。しかし、この「経験」というのが、多くの健康教育実施者をもって、参加型・能動的学習への参入を尻込みさせる要因になっている。つまり、実施者自身が、参加型・能動的学習について学ぶ機会を十分もたない場合、「やり方がわからない」「むずかしい」「めんどうだ」「自信がない」「もっと学ぶ必要がある」と感じる。あるいは、たんに、みずからがそのような学習方法で学習した経験がないため、興味を感じてはいるものの、その意義や効果に確信をもてない。

そこで、筆者らは、参加型・能動的学習のみずから立案・実施した経験と、いくつかのヒ

アリング調査の結果から、「手軽にできる」ことの意味を「負担が少ないこと」と読み替え（表1）、「負担」の要素をいくつかに分解し、「ワーク」の作成を試みた。その試案集から、古典的な一斉授業と併用して用いることのできる、とりいれやすい「ワーク」をいくつか例示する。

表1 ワークの立案にあたって勘案すべき諸点

実施者	対象者
<ul style="list-style-type: none"> ・ 準備計画の時間 ・ 費用 ・ 難易度 ・ 実施する際の指導量 ・ 熟練度 ・ 対象理解の度合い ・ 信頼関係 ・ 不測の事態に対応しやすい／フレキシビリティ 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 難易度 作業量／動作性 技能 ・ 心理的負担 参与度や自己開示の量と質 場面での対人配慮 他者と比較する／される

5. 手軽にできる「ワーク」：3つの事例

5.1 基本の考え

(i) 導入から、(ii) ミニ・レクチュア（一斉授業方式でのまとまった健康情報の提供）と (iii) 「ワーク」を経由して (iv) 終結に至る道筋において、ひとつの授業が構成される（図3）。ミニ・レクチュアでは、その時間に学習したい健康問題について、実施者による従来型の情報提供を行う。ワークは、その内容にもとづいて展開する。つまり、ミニ・レクチュアは、その時間に学んでもらいたい情報のインプットであり、ワークは、学習者がとりいれた情報を吟味咀嚼し、なんらかのかたちで外に出すためのアウトプットの経路という位置づけになる。

ワークは、以下の基準で構成する。

- (1) 経路多様化の要素：アウトプットの経路を多様化する。例) 「書く」と「話す」の併用。
- (2) 個人化の要素：学習したい健康情報に人格的背景をもたせる、学習者の経験に当てはめてアウトプットを行う。例) 個人の所有物になるような成果物を作成する。物語の中に情報を入れこむ。
- (3) 時間の要素：インプットをアウトプットに変えるための内的作業に必要な時間の確保。
- (4) 選択の要素：例) ミニ・レクチュアの内容から学習者がワークのアウトプットとする題材を選ぶ、複数の種類の画材・教材の中から選ぶ等。
- (5) 調節の要素：難易度や作業量の上げ下げ、自己開示の範囲などを調節する

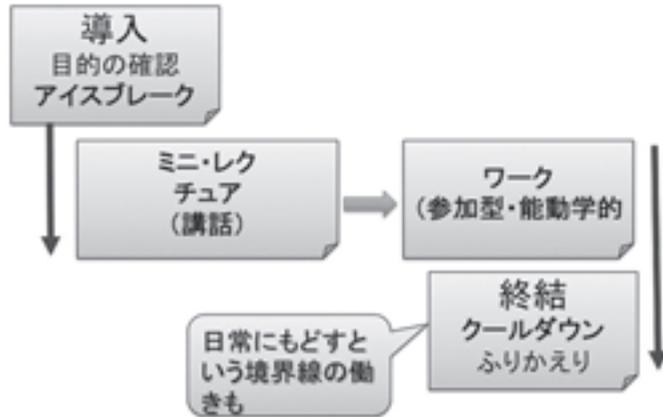


図3 一斉授業型学習とワークをとりいれた参加型・能動的学習の混合

5.2 「闘病記の朗読」

このワークは、その簡便さに比較して、題材や進め方の工夫にヴァリエーションをもたせることができる。以下に記述するのは、筆者（徐）の立案による方法である。準備と、進め方は以下のとおりである。

《方法の骨子》

- (1) ある病気の患者自身の手になる闘病記、患者の家族が書いた手記の2種類を用意する。実際の家族関係にある人が書いた2種類の手記である必要はないが、同じ病気の経験について書かれた手記をえらぶ。例えば、白血病の患者が書いた闘病記と、白血病の子をもつ女性の書いた手記など。
- (2) 2名に割り当てて朗読してもらう。
- (3) ふりかえり。読んでもらった人は、どのように感じたかを聴衆と分かち合う。聴衆の希望者から意見の分かち合いをしてもらう。

《ヴァリエーション》

- (1) 役割交換。ペアをつくり、手記を交換してそれぞれが2種類の手記を読み上げる。
- (2) ペアで行う、小グループに分割して行う。時間に余裕があれば、朗読の練習も行う。劇のように、手記中の登場人物のセリフを分担して読み合わせてもよい。
- (3) 発表、ふりかえり、意見交換について。自己開示に抵抗感があると判断した場合には、個人シートへの書き込みだけに留めるなど、「ワーク」を行ったあとの分かち合いの方法を工夫することができる。また、時間の不足したときには、ふりかえりと意見交換の発表時間を短縮して調節することができる。

この「ワーク」を用いる利点のひとつは、題材は、闘病記などからかんたんに採取できるということである。ロールプレイを行うとなると、シナリオを用意したり、リハーサルをしたりと準備にも進行にも時間がかかるが、この方法であれば、他者の経験から間接的に学ぶ機会と、役割交換によって、ひとつの状況（闘病生活）について異なった視点に立つという間接体験が可能になる（個人化の要素、選択の要素）。

また、他者に読み聞かせる時間は、文章に集中し、吟味する時間となる。読みながら、書き手のことを考え、読みながら、自分の体験を思い出す、情報の個人化をうながすプロセスそのものとなり得る（時間の要素）。さらに、闘病記には、健康や病気についての情報がとっぜん記述されているわけで、それらから、「病気になることとはどんなことか」ということだけでなく、病気の症状や経過などについての知識を得る機会にもなる。手記というストーリー性のある題材は、参加者の関心と意欲を引き出し、「健康についてなにか教わる」ことにつながる心理的抵抗感が減ずる効果をもたらす。

5.3 「かるたづくり」

この「ワーク」は、既習事項の復習や、ミニレクチュア（講話）のあとのまとめに用いることができる。

《方法の骨子》

- (1) 手帳サイズの厚紙2枚を配布する。
- (2) その日（あるいは前回）、学習したことがらの中から、1つの次項を選んでカルタをつくる。カルタであるから、厚紙の1枚には、読み上げる文句、もう1枚には絵と冒頭1文字を書き入れる。
- (3) 参加者同士、選んだ冒頭一文字（あいうえお）を重ねないように調整する必要はない。
- (4) 図工の授業ではないので、各人の自由が最大限許されることを伝える。作品の優劣を競うものではないと、はっきり伝える。
- (5) 絵が苦手な生徒でも楽しめるよう、シールなどを活用する。
- (6) 作品として、発表する。（班で、個人で）。

《ヴァリエーション》

- (1) 時間に余裕があれば、最後に班でかるた遊びをしてみる。
- (2) 今日の学習成果として、個人がもちかえる。
- (3) 持ちかえた作品の保管期間をみなで決める。その保管期間中は、よく見える場所にかざしておく。
- (4) 持ちかえた作品の保管期間や廃棄の方法もふくめ、学習者各自が決める。

この「ワーク」のポイントとしては、カルタ札1組をつくることによって、かならず1点は確実な学びがあるという点である。また、数ある既習事項の中から、一つを自分で選ぶ、そしてそれを形あるものにするすることで、選んだ情報が個人化される。「授業のなかから、必ず一つ（の学び）を持ち帰ってもらう」という表現が聞かれることがあるが、「かるたづくり」のワークでは、文字通り、モノとしてかばんに入れて持ち帰ることができるのである。作成後の保管や廃棄の方法を、みなで申し合わせて決めることも、制作した本人に完全にゆだねることもできる。

「かるたづくり」はシンプルで幼児にもできそうな簡単な「ワーク」であるが、かるたにのせる健康知識、かるたの冒頭文字、絵柄から画材、処分の仕方まで、複数の選択肢を用意して、学習者自身に逐一選んでもらうというプロセスが連続する。自分で「選ばなければならない」状況を構成することによって、複数の選択肢があるばあいには「自由に自分で選んでもよい」というマイクロメッセージを発することができる。こういう小さな工夫で、日本の学校文化で希薄だといわれている自己決定の体験をふやすことができる。

5.4 「無名の手紙交換—100人の中の99人と100人の中のひとりへ／から」

この「ワーク」は、筆者が、まず、看護学生および助産師対象の授業中の「ワーク」として基本の方法を考案し、のちに、他の場面でのヴァリエーションを付け加えたものである。題材は、発案当初のテーマは「避妊の失敗」と「アルコール依存症」であるが、この方法は、さまざまな健康問題、とくに、社会のおもてになかなか上がってこない問題へ活用が可能であろう。

《方法の骨子》

- (1) 看護学生あるいは助産師として若い男女に宛てて2種類の手紙を書く。



図4 無名のお手紙交換
100人の中の99人と100人の中のひとりへ／から

- (2) 男女どちらが読んでもよい内容にする。
- (3) 2種類の手紙をひとつの封筒と一緒にに入れて封をする。
- (4) 手紙の内容は、以下のとおり。1種類目は、これから、セックス（性体験）を経験する若い男女に向けての自由なメッセージ。2種類目は、すでに性的活動を開始していて、避妊の失敗を経験している若い男女へのメッセージである。
- (5) 手紙を封筒ごとあつめる。シャッフルしたあと、参加者に再分配する。
- (6) 再分配された手紙を開封する。2種類の手紙のうち、自分にあてはまるものを自分あての手紙としてえらぶ。自分にあてはまる手紙を選んで、返事を書く（図4）。

《ヴァリエーション》

- (1) テーマを変える。例えばアルコール依存症の当事者／当事者家族として高校生に宛てて2種類の手紙を書く。2種類の手紙の内容は、ひとつは、アルコール依存症についてよく知らない、身近でない高校生に宛て。もうひとつは、アルコール依存症の家族がいる高校生に。または、すでに飲酒を開始している高校生に宛て、とする。
- (2) 高校生が、別の高校生に向けて、2種類の手紙を書く。
- (3) 2種類の手紙を実際に、誰かに渡して読んでもらう。
- (4) 受け取った手紙の内容の分かち合いや、話し合いの方法は、グループの大きさや、とりあげる健康問題によって、調整する。公表せずに、個人に留めてもよい。

このワークでも、2種類の手紙より1種類を選ぶ、という選択の要素を入れた。また、手紙という形式により、情報が個人化しやすくなる。この「ワーク」で作成した手紙をもちいて、実際に、やりとりをアレンジすることもできるが、不可視化しやすい健康問題を取りあつかう場合には、「ワーク」の参加者のプライバシーと心理的安全を十分に勘案した上で、行うべきである。

以上、3点の事例を紹介したいずれも、作業としては簡単なものである。だが、対象（学習者）や、場面での相互作用によって、難易度や作業量の上げ下げ、自己開示の範囲などを調節することができる、という柔軟性を工夫した。また、作業や活動の結果は、個人化（personalize）しやすいかたちとなる。

6. まとめ

参加型・能動的学習といえば、大きな製作物への取り組み、生徒・児童・学生に計画の立案からまかせるという時間と手間のかかるもの、野外学習といった指導に際して特別な経

験や知識が必要なものなど、おおがかりなものを想像しがちである。また、「主体的な学び」への過度の期待から、実施者が周到な計画と準備をしたにもかかわらず、事前に想定したアウトプットと現実の結果のあいだのひらきに、実施者が次回への意欲を削られることもある。しかし、参加型・能動的学習は、特別イベントである必要はない。まずは、短い時間でできる小さな「ワーク」を、機会をみつけてとり入れる、あるいは、参加型・能動的学習の要素（例えば、自由に選択するという行為）を通常の学習活動に少しでも取り込んで、学習者に、多くの小さい体験を積んでもらう。

学習者、とくに若い学習者は、教育者が想像する以上に早く、あいまいな状況での学習活動に慣れていく。教育者が試行錯誤をしているうちにも、学習者は、指導者と指導を受けるものの役割関係がはっきりしない場面、自分が動かなければ学習活動がすすまない場面での動き方を、いつのまにか身につけて行くのである。ただし、そのような場面が、教育者によって用意されなければ、その可能性は閉ざされたままである。若い学習者は、将来の実施者となる。学校や、教室でなくとも、いかなる領域でも、学習活動や教え教えられるという関係は生じるからである。参加型・能動的学習と銘打った活動をわざわざ特別におこなわなくとも、小さな「ワーク」の積み重ねによって、一斉授業型の混合によって、典型である座学以外のスタイルを経験することが、重要であると筆者らは強調したい。

引用文献（アルファベット順）

- Bandura, A. (1977) *Social learning theory*. Englewood Cliffs, NJ: Prentice Hall.
- Bandura, A. ed. (1995) *Self-Efficacy in Changing Societies*. Cambridge: Cambridge University Press. =バンデューラ、アルバート編（1997）本明寛他訳『激動社会の中の自己効力』東京：金子書房。
- Bartholomew, L Kay et al. (2006) *Planning Health Promotion Programs: An Intervention Mapping Approach*. 2nd ed., San Francisco: Jossey-Bass.
- Becker, Marshall H. (1974) "The Health Belief Model and the Personal Health Behavior", *Health Education Monographs* 2:324-508.
- Cline, Rebecca J. W. (2011) Everyday Interpersonal Communication and Health. In "*The Routledge Handbook of Health Communication*," 2 ed., Pp.377-396, New York: Routledge.
- Dolmans, Diana & Schmidt, Henk (2010) "The problem-based learning process" in Van Berkel, Henk et al.(eds) *Lessons from Problem-based Learning*. Oxford: Oxford University Press, 13-20.
- Ferguson, I. (2007) Increasing User Choice or Privatizing Risk? The Antinomies of Personalization. *British Journal of Social Work* 37:387-403.
- Glanz, Karen et al. (2008) *Health Behavior and Health Education: Theory, Research, and*

- Practice*. 4th Edition, San Francisco: Jossey-Bass.
- 東優子、徐淑子、兵藤智佳 (2004) 「若者のセクシュアル／リプロダクティブ・ヘルスに対するピア教育の理論と実践」『日本エイズ学会誌』 6(3):29-132.
 - 池田光穂 (2011) 「ヘルスコミュニケーションをデザインする」『Communication-Design』 6:1-16.
 - 池田光穂 (2011) 「情動の文化理論にむけて：『感情』のコミュニケーションデザイン入門」『Communication-Design』 8:1-34.
 - 池田光穂 (online) 「アクティブ・ラーニング」
http://www.cscd.osaka-u.ac.jp/user/rosaldo/100228active_learning.html (2014年9月30日最終確認).
 - Maibach, Edward et al. (1995) *Designing Health Messages: Approaches from Communication Theory and Public Health Practice*. Thousand Oaks: SAGE Publications.
 - Malekoff, Andrew (2004) *Group Work with Adolescents: Principles and Practice*. 2nd ed., New York: The Guilford Press.
 - Meyer Hilbert (1987) *Unterrichts Methoden II*, Berlin: Cornelsen Verlag Scriptor = マイヤー, ヒルベルト (2004) 原田信之他訳『授業構造の解明のために：授業方法・技術と実践理念』京都：北大路書房。
 - Médecins du Monde (2011) The KAP Survey Model, Medinine du Monde(MdM), <http://www.medecinsdumonde.org>, (2014年9月30日最終確認).
 - Miller, William R. and Rollnick Stephen (2002) *Motivational Interviewing Second Edition Preparing People for Change*. New York: The Guilford Press. = ミラー, ウィリアム他 (2007) 松島義博・後藤恵 (訳)『動機づけ面接法：基礎・実践編』東京：星和書店。
 - 宮坂忠夫、川田智恵子、吉田亨編著 (2007)『最新保健学講座別巻1 健康教育論』：東京、メチカルフレント社。
 - Monahan, Jennifer L. (1995) “Thinking positively-using positive affect when designing health messages” in Maibach E et al (eds). *Designing Health Messages: Approaches from Communication Theory and Public Health Practice*. Thousand Oaks: SAGE Publications.
 - 宗像恒次 (1996)『最新行動科学からみた健康と病気』東京：メヂカルフレンド社。
 - Parrott, Roxanne L. (1995) “Motivation to attend to health messages- presentation of content and linguistic considerations” in Maibach E et al (eds). *Designing Health Messages Approaches from Communication Theory and Public Health Practice*. Thousand Oaks: SAGE Publications.
- Prochaska, James and DiClemente, CC. (1983) “Stages and processes of self-change of smoking: toward an integrative model of change”, *Journal of Consultation and Clinical*

Psychology 51(3):390-395.

- Prochaska, James et al. (1994) *Changing for Good: a revolutionary six-stage program for overcoming*. New York: Quill = ジェームズ・プロチャスカほか (2005) 中村正和ほか (訳) 『チェンジング・フォー・グッド：ステージ変容理論で上手に行動を変える』法研：東京。
- 佐藤学 (2010) 『教育の方法』東京：左右社。
- 徐淑子、生島嗣、池上千寿子 (2006) 「高校生世代を対象とした「性の健康」についての健康教育教材パッケージの開発」『厚生労働科学研究費補助金エイズ対策研究事業，HIV感染予防対策の効果に関する研究，平成17年度総括・分担報告書』（厚生労働科学研究費補助金エイズ対策研究事業・研究代表者：池上千寿子）Pp.9-14。
- 上田信行・中原淳 (2013) 『プレイフル・ラーニング：ワークショップの源流と学びの未来』東京：三省堂。

ハンセン病と短歌 映画〈小島の春〉をめぐって

松岡秀明 (大阪大学コミュニケーションデザイン・センター：CSCD)

Leprosy and Tanka

On *Kojima no Haru*, a movie released in 1940

Matsuoka, Hideaki (Center for the Study of Communication-Design: CSCD, Osaka University)

1940年公開の映画〈小島の春〉は、国立癩療養所長島愛生園で癩の治療に携わった医師小川正子の手記『小島の春』(1938年刊)を原作とする商業映画で、癩を扱った映画として話題となり、『映画旬報』1940年度の優秀映画で第一位となった。この映画の特徴のひとつは、たびたび短歌がスーパーインポーズされることである。本稿は、まず1930年代後半から癩患者の文芸が評判になっていたこと、特に短歌が注目されていたことを検証する。次に、映画にしばしば現われる美しい風景とともに、小川正子と癩患者の短歌は、観る者を癩の現実から目を遠ざける作用をしていることを指摘する。

This paper explores a film entitled *Kojima no Haru* or Spring in the Island, released in 1940. Based on the best seller book of the same title by a female doctor who devoted herself to the care of leprosy patients, this film focuses on leprosy. One of the features of the film is superimposition of Tanka, a Japanese short poetry consisting thirty-one syllables. Literary works by leprosy patients began receiving public attention in the late 1930s. Featuring Tanka diverts the audiences' attention from the reality of the disease.

キーワード

ハンセン病、短歌、隔離

Leprosy, Tanka, Isolation

はじめに

日本におけるハンセン病については、医学はもちろん、社会学、歴史学などのさまざまな学的領域からアプローチがなされてきた。ハンセン病患者の手になる小説、短歌、俳句等々の文芸作品も現在比較的容易に読むことができるようになっており、それらについての研究も蓄積がある¹⁾。

1938年に出版された『小島の春』は、癩の治療に携わった医師小川正子の手記である²⁾。『小島の春』は、著名人に絶賛されベストセラーとなり映画化されるに至る。1940年に公開された映画〈小島の春〉は、この小川の手記『小島の春』を原作とした癩を主題にした商業映画である(以下、小川の著書は『小島の春』、映画は〈小島の春〉と表記する)。この映画は大きな話題となり、『映画旬報』1940年度の優秀映画で第1位となった。荒井[1996:79]は、

こうした一連の出来事のなかで、小川が「女性的・キリスト教的ヒューマニズムの象徴、さらには救済的機能さえ付されて神話的存在」となっていたことを、『『小島の春』現象』と名づけている。この現象は、マスメディアの存在なしにはありえなかった事態である。

〈小島の春〉の特徴のひとつは、たびたび短歌がスーパーインポーズされることである。この映画については、これまでいくつかの研究がある³⁾。この映画で癩患者がどのように表象されているかを検討した石居〔2010〕は、短歌の挿入を「見る者の共感を誘う仕掛け」としての「表現上の特色」とであると指摘している(石居〔2010:157〕)。一方、〈小島の春〉をさまざまな視点から詳細に分析した藤井〔2002-3〕は、この映画における短歌を、癩患者の「凶々しいまでの現前から目をそらせるコード化された心地よい代理物」(藤井〔2003b:27〕)と捉えている。しかし、石居も藤井も短歌についてはそれ以上の考察は加えてはならず、この映画で重要な役割を果たしている短歌について十全に検討されてきたとは言い難い。

〈小島の春〉は、マスコミュニケーションとしての映画に、大衆文芸としての短歌がどのように用いられたか、そしてこの二つのジャンルは癩とどのようにかかわったかを検証する際の貴重な資料である。ベイトソン〔1986:17〕が指摘するように、映画は一人の作者が作りあげるものではなく、それを作る一群の人々によって創造される。本稿は、当時の短歌と癩の関係を導きの糸として、どのような力が働いてこの映画が出現したのか、この映画のなかで癩がどのように表象されているかを検討しつつ、この映画において短歌はどのような機能を果たしているかについて分析することを目的とする。

1. 「救癩の手記」としての『小島の春』

『小島の春』は、瀬戸内海の小島である岡山県の長島にある国立癩療養所長島愛生園に勤務していた女性医師小川正子(1902～1943)の手記である。小川は長島愛生園だけでなく、園長の光田健輔の命を受けて積極的に島外で検診を行ない、癩患者を発見すると長島愛生園への入園を促した⁴⁾。そして、小川は短歌を詠みキリスト教を信仰する人物であった⁵⁾。

1902年に山梨県に生まれた小川正子は、1918年甲府高等女学校卒業し20年に遠縁にあたる法務官僚と結婚する。しかし1923年には離婚し、翌24年に東京女子医学専門学校に入学して29年に卒業する。1932年6月から結核に罹患して山梨へ帰郷する1938年10月まで、医官として長島愛生園に勤務した。郷里で1943年4月29日結核のため亡くなっている⁵⁾。

1938年11月に長崎出版から刊行された『小島の春』は、光田の命を受けた小川が、各地で癩患者を見つけ出しては入園を促すとともに、癩についての啓蒙活動を行なう旅の記録である。そのなかに小川の自作の短歌が散りばめられており、歌日記とも呼べるようなテキストとなっている。初版第一刷は500部であったが、中山〔1984:83〕によれば、「当時の群

書を圧して220版、22万冊を数える」売れ行きを示した。この部数は、当時としては異例のベストセラーである。

『小島の春』の本文の前には写真や序文があるが、これらは重要な意味をもっている。まず、書名と著者名が記された頁をめくると、その裏、つまり右側のページには小川正子の光田健輔への謝辞、左側のページには長島愛生園の上司である園長の光田健輔の写真が掲載されている。背広を着てネクタイを締め穏やかな表情の光田の写真の下には、「光田長島愛生園長近照」と記されている。小川がいかに光田を尊敬していたかが、この2ページにはっきり示されている。

続く8ページに亘って、長島や小川が検診を行なった四国の風景等の写真15葉が掲載されている。これらの写真についての論考を含む別稿を準備しているので、以下の点だけを指摘しておきたい。患者が写っていることが明示されている写真は、「日向ボッコをする病者（長島にて）」というキャプションが付された一枚だけである。しかし、斜め後ろ姿が写る患者の表情は小さくてはっきりしない。このことは、後に検討する映画〈小島の春〉の構成とかかわっている。この写真以外に小学校での講演会の準備の写真1葉を除くと、残る13葉は美しい風景写真である。

続いて、高野六郎、下村海南、光田健輔の順で「序」が現われる。後に見るように、高野は当時の救癩運動で大きな役割を果たしており、下村も救癩運動に関心を持っていた。歌人でもあった下村は、『小島の春』の特徴を的確に指摘している。

僕は短歌の方に足を踏み入れてゐるからいふでは無いが、此作品は著者の血と汗と涙に滲んで筆先に、歌が彩られてゐる事により、得もいはれぬ暖かな懐かしさ、或るなごやかな気分を味ひ得るは嬉しくもあり、有りがたいと思ふ（下村 [1938：序 5]）。

たしかに、挿入されている短歌は癩についての記述を中和し、読後感をさわやかなものにする効果を持っている。後に検討するように、このことは映画でも継承されるのである。

新聞に掲載された知識人の次のような賞賛は、『小島の春』がベストセラーとなる後押しをしたと思われる。文芸評論家として当時大きな影響力を持っていた小林秀雄は、東京朝日新聞の1939年1月11日号掲載の書評で [1939]、『小島の春』を、嘘がない人間記録と評価し、「近年読んだ本のうちで、最も感銘の深いものであった」と絶賛している。

東大教授の皮膚科医で癩の研究を行っていた太田正雄も、『小島の春』に感動した一人である。太田は、木下杢太郎のペンネームで創作や評論等の文芸活動を精力的に行っていた人物でもある。日記によれば、太田は1939年2月12日甲府へ日帰りの講演に出かけた車中で『小島の春』を読んだ（木下 [1980：169]）。後述する「癩文芸を語る」という座談会で、太田は『小島の春』を「読み乍ら涙が出て先が読み続けられなくなり、それをまぎらわすため禁煙車と気づかず煙草を吸ってしまい、車掌に注意された」と語っている（阿部他 [1939] 166）。その後太田は、木下杢太郎名義で1939年3月20日の『東京日日新聞』の読

書欄に、『小島の春』を絶賛する評を寄せている（木下 [1939]）。まず太田は、『小島の春』が「救癩手記」であるとする。太田は、癩根絶のためには調査、宣伝、治療が必要であると説き、『小島の春』は、「唯功利的の立場からいっても、この宣伝の功が満点に値している」と述べる。そして太田は、小川正子を「天稟と文体と俱に備はつた女詩人」と高く評価し、「救癩手記」であることを除いても、『小島の春』は「すばらしい田園文学」であるとも記している。

2.

昭和10年代前半における癩と短歌—改造社の果たした役割をめぐって

映画〈小島の春〉が制作された背景には、癩患者の手になる文芸—「癩文芸」と称される場合がある—についての関心が高まっていたという事実がある。川端康成が激賞した北條民雄の「いのちの初夜」が1936年（昭和11）に『文学界』2月号に発表され、第2回文学会賞を受賞したのを契機として、少なくとも文学者や文学に関心を持つ者の間で、癩患者による文芸が注目されるようになる。この、「癩文芸」ブームで、大きな役割を果たしたのが改造社である。

1919年に創業した改造社は、同年総合雑誌『改造』を創刊した出版社である。創業から1944年に軍部の圧力によって解散に追い込まれるまで（戦後、再び出版を行なうようになったが）、改造社は大きな社会的影響力を持った出版社だった。

では、改造社は癩患者の文芸にどのようにかかわってきたか。1937年、この出版社は明治以降の短歌による『新万葉集』全11巻の出版を企画し、短歌を募集した。一人20首までとするこの公募に対して、応募された短歌の総数は40万首にのぼるといわれる（村井 [2012 : 266]）。1938年1月に出版された『巻一』に、長島愛生苑の癩患者明石海人（1901～1939）の短歌が11首入選を果たした。この『巻一』には、明石以外にも数名の癩患者の短歌が収められている。

このことに対して太田正雄が、『短歌研究』の同年4月号に「新万葉集のうちの癩者の歌」というタイトルの評論を寄せている。1962年からは短歌研究社という出版社が発行しているが、『短歌研究』は1931年にやはり改造社が創刊した短歌専門の月刊誌である。現在、『短歌研究』の他に、『短歌』、『歌壇』、『短歌往来』等の短歌専門の月刊誌が出版されているが、この当時は結社を超えた短歌誌の『短歌研究』が歌人に大きな影響力を持っていた。この評論で、太田は『新万葉集 巻一』のなかの癩患者の短歌—特に明石のそれ—を紹介している。その後明石は、1939年3月23日改造社から歌集『白描』を出版し、岡野（[1993 : 492]）によれば25,000部のベストセラーとなる。明石は、『白描』出版後間もない同年6月9日に死去している。

太田正雄が『小島の春』を読んで間もない1939年2月24日 - 『白描』はまだ発売されていない -、癩予防協会主催で「癩文芸を語る」という座談会が銀座ニューグランドで開催され（成田 [2004 : 213~4]）、太田も参加している。その記録は、『改造』1939年7月号に「癩文学を語る」というそのままのタイトルで掲載されている。この座談会の発言者の顔ぶれと発言内容は、癩患者と文芸の関係を考える際に重要である。

では、どのような人物がこの座談会に参加したか。出席者は五十音順に、阿部知二、内田守、太田正雄、小林秀雄、下村宏、本田一杉、高野六郎の7人で、いずれも当時癩に積極的にかかわっていたか、関心を持っていた。座長の下村宏（海南）（1875~1957）から簡単にその人となりを見ていくことにしよう。下村は当時貴族院議員で、癩に関心を持っていた。後に日本放送協会会長を経て終戦時には内閣情報局総裁として玉音放送にかかわった人物でもある。

司会役を務めた高野六郎（1884~1960）は北里柴三郎門下の医師であり、慶大教授、北里研究所所長等々を歴任した日本の予防医学界の重鎮である。そして高野は、日本の癩に対する政策、すなわち患者の絶対隔離に深くかかわっていた人物でもあった。東京帝大医学部を卒業後国立伝染病研究所に入所した高野は、この座談会当時厚生省予防衛生局局長を務めていた。1931年に発表した「癩の根絶」という論文で、癩予防法、国立療養所、癩予防協会によって癩を根絶することができるとする持論を展開している（高野 [1931]）。1931年といえば、その8月1日から癩予防法が施行された年である。また、癩予防協会はこの年の1月21日に創立された団体である⁶⁾。

この座談会には、高野のほかに医師が3人の参加している。まず、太田正雄（1885~1945）だが、既に紹介している。二人目の医師は、内田守（雅号は守人（もりと））（1900~82）である。1920年に熊本医専を卒業した内田は、1924年熊本の九州診療所の眼科担当の医局員となる。1936年に長島愛生園に転じ、光田健輔の指導を受ける。短歌結社「水甕」に属し内田守人の名で短歌を発表していた内田は、癩患者に短歌を詠むことを奨励したが、それは後に見ていく。最後は、本田一杉（ほんだいっさん1894-1949）である。大阪在住の医師の本田は俳人でホトトギス同人であり、自ら俳句雑誌『鳴野（しぎの）』を出していた。本田は、各地の癩療養所で俳句指導を行っていた。

文壇からは、阿部知二と小林秀雄の2人が出席している。先に引いたように、小林秀雄（1902~1983）は、『小島の春』を絶賛した。一方、阿部知二（1903~1973）は作家だけでなく英文学者としても知られる。1936年に出版した『冬の宿』が好評を博して、当時新進作家として知られるようになっていた。

座談会は、癩患者の小説、短歌、俳句についてだが、本稿では短歌について検討する。内田によれば（阿部他 [1939 : 162]）、癩療養所で短歌が始まったのは1923~24年（大正12~13）である。この座談会の時点で、「各療養所に機関雑誌」があり、患者たちは「それに

依って勉強」している。そして「療養所で中央の雑誌に投稿して勉強して居る者が百人位」いるという⁷⁾。

なぜ短歌か、という問題をここで考えておきたい。短歌は、五七五七七とシラブルを続けていけばとりあえず形にはなる。そのため、それまで文章を書いたことがなかった人々でも、比較的容易に短歌を作ることができる。そして、療養所の短歌サークルに入れば友人もできる。結核療養所や癩療養所で、いわゆる「療養短歌」が広まったのは、短歌を作ることの簡単さと療養所内に同好の仲間ができることに拠るところが大きいと思われる。

ところで、この座談会に出席していた者のうち内田以外にも短歌を実際に作っていた者がいる。太田正雄が木下空太郎のペンネームを用いて行っていた創作活動の中心は詩や戯曲だが、短歌もつくってはいる。高野六郎も、短歌を詠んだ。没後の1961年に内田守が編集し出版された『高野六郎歌集』がある(高野 [1961])。また、明石の歌集『白描』には、松籟という題で短歌2首が収められているが、その詞書に「内務省衛生局予防課長として、歌集『銀の芽』の歌人として我等に親しき高野六郎氏」とある(明石 1939: 81)⁸⁾。そして、内田 [1938: 215] によれば、「癩院の短歌運動で一番早い」ものは1915年頃高野六郎が、「東京の目黒の慰疾園(私立)で一人で女患者に短歌を指導された事」であるという⁹⁾。高野はその後、「癩院の短歌並に一般文芸運動に非常に意義を感じ…熱心に声援」した。そのため、「癩院から出る歌集には殆ど先生の序文を見ないものは無い程である」という(内田 1938: 215)。

下村も積極的に短歌にかかわっていた。1915年に佐佐木信綱が主催する短歌結社の竹柏会心の花に入った下村は、歌人としても知られており、下村海南の名で5冊の歌集を遺している。『芭蕉の葉蔭』(1921)、『天地』(1929)、『白雲集』(1934)、『蘇鉄』(1945)、『歌歴』(1959 没後出版)がそれである¹⁰⁾。すなわち、この座談会の出席者7人中4人がなんらかの形で短歌にかかわっていたのである。

さて、座談会ではまず司会の高野が、この座談会は「一方には癩患者に力を添へ、一方には世間の人が癩に関する関心を成るたけ新鮮ならしめたいといふやうな考」えにもとづいていると挨拶している(阿部他 [1939: 160])。続いて、高野に促され最年長の下村が話を始める。下村は、療養所の患者たちに、「短歌や俳句に依つて先づ心の治療」をする、と語り、患者たちは「文芸といふことで非常な慰安を得て居るに相違ないと思ふ」と続けている(阿部他 [1939: 160])。さらに下村は、明石海人らの歌人が現われ、患者の手になる小説も「主だった雑誌」に掲載されるようになった、と述べる。短歌では、『新万葉集』に少なくとも56人の癩患者が入選している。このような状況を踏まえて、内田は、「只今は療養の短歌というふものは脂が乗り切つて居る所であります」と主張するのである(阿部他 [1939: 162])。

下村は、さらに、『小島の春』が出版されたことに触れ、癩に対する「世間の関心も非常に多くなって居る時だと思ひます」とも述べている(阿部他 [1939: 160])。この癩につい

ての世間の関心に関連して、阿部知二が興味深い発言をしている

実は昨日も或る映画会社の人と会って話したのですが、この頃どういものを作ったら
アッピールするだろうという時に、そこの宣伝部の人ですが、ヒューマニスチックの方
なら間違ないということをやつて居つた（阿部他 [1939：163～4]）。

座談会の流れから考えると、阿部は癩の映画化についての可能性について語っている。阿部がどの映画会社の宣伝部長と会ったかは不明だが、癩というおおよそ映画で扱うこと容易ではないテーマも、「ヒューマニスチック」なアプローチをすれば扱いうると考えていた映画人がいたことを伺うことができる。そして、この座談会から1年半を経ずして癩を主題とする最初の日本映画〈小島の春〉が公開された。すなわち、この映画は、これまで見てきたように癩に直接あるいは間接にかかわってきた有力者がマスメディアで発言的にこの病気について発言するようになったという時代の流れのなかに出現したのである。

3. 〈小島の春〉のレトリック

〈小島の春〉は、1940年7月31日に封切られた。制作会社は東京発声映画、配給は東宝が行なった。出演者は、主演の小山先生に夏川静江、癩患者横川に菅井一郎、横川の妻に杉村春子である。杉村は一人二役で、桃畑の一軒家に住む癩患者の女の役もこなしている。また、子役時代の中村メイ子がキヨ子を演じている。監督は、小説を原作とした映画を数多く監督したことで知られる豊田四郎（1906～1977）、脚本は八木保太郎（1903～1987）が書いた。

『日本医事新報』は、1940年8月15日号の「新映画評」で3ページに亘って〈小島の春〉を取り上げた。執筆者は〈癩文芸を語る〉に参加していた太田正雄、高野六郎の二人の他、長島愛生園園長の光田健輔、東京女子医専校長の吉岡彌生、女性医師の団体である日之出会の会員多川澄子のあわせて5名で、水原秋桜子が「映画『小島の春』を見て」という題で俳句3句を寄せている。

日記によれば、太田は1940年7月26日、公開に先立って試写会で映画〈小島の春〉を見ている。

午後五時日本医事新報記者たづね来り、一緒に出て（中略）厚生省主催の「小島の春」
を見にゆく。（七時開演）産業会館。出来甚だよろし。即ち原作の故なり。又配景も佳
なり。（中略）依頼による「小島の春」の感興を書く（木下 1980：384-5）。

ここで注意しなければならないのは、「厚生省主催の『小島の春』」という文言である。厚生省主催で上映会が開かれ、東大医学部教授で癩を研究していた太田が招かれ、さらに『日本医事新報』に評を書くことが決まっていたのである。『日本医事新報』は、1921年に創刊さ

れ現在に至るまで発行されている週刊誌で、読者としては医師を想定している。すなわち、太田にはこの映画の宣伝すること、否それ以上に医師に対して癩の啓蒙を行なうことが期待されていたのである。

太田が書いたのは、しかし、必ずしも期待されたような趣旨の文ではない。『日本医事新報』に寄せた映画評で、太田は当時の癩についての認識を批判しているからである（[1940: 57]）。太田は、癩が不治と考えられていることで、「患者の間にも、それを看護する医師の間にも、それを管理する有司の間にも感傷主義が溢れ漲っている」と批判する。にもかかわらず、太田は〈小島の春〉を高く評価する。太田は、小川正子の原作の良さが監督、脚本家、出演者に影響したとし、それゆえに映画の「初からしまひまで作者の魂に直面しているのであると云つて可い位だ」と述べるのである。そのうえで太田は、〈小島の春〉が「徹頭徹尾あきらめの動画」とあり、「此の感傷主義が世に貽つた最上の芸術である」とアイロニカルに語るのである（太田 [1940: 58]）。（太田 [1940] 1982: 190~1）。

一方、7月31日に日本劇場でこの映画を観た映画評論家の友田純一郎は、『キネマ旬報』9月11日号に寄せたこの映画の評の末尾の「興行価値」と題された欄に、次のように記している。

感銘価値豊富。東発作品中営業的に最も期待されるものであり、東京では各館で続映された（友田 [1966 [1940]: 82]）。

〈小島の春〉は批評家には好評で、『映画旬報』（『キネマ旬報』の後継誌）の年間ベストテンで一位を獲得するのである。

しかし、原作がベストセラーとなっていたからとはいえ、当時癩をテーマとした映画を制作するのは容易ではなかったと考えられる。〈小島の春〉封切り直前の1940年7月24日の『東京朝日新聞』に、Qこと津村秀夫は次のように書いている。

二、三年前迄の日本映画界の興行常識では癩病患者の続々出る映画などを企画する者は狂人扱ひされたであらう（津村 [1940]）。

では、映画を製作する側は癩の映画化についてどのように考えていたのだろうか。脚本を書いた八木保太郎は、〈小島の春〉が公開されてから26年後の1966年に次のように述懐している。

原作は、劇的要素の全くない随筆であった。それを、どうドラマチックなものにするか。それと、レプラを扱うということに対する、一種の生理的な反発みたいなものを、どう処理するか。それが、問題であった。どだい、それまでの常識からいっても、映画にしようなどと考えられる素材ではなかったのである。

そこで、短歌を使った。ドラマ的にも、また、生理的反発を避けるためにも、これは有効な手段だったと思っている（八木 [1966: 63]）。

〈小島の春〉は短歌以外にも、観る者の「生理的反発」を回避する方策を二つとっており、

まずそれから検討してみよう。一つめは、藤井（2003：38）が「患者の姿を見せずに済ませる」と表現するような手法である。すなわち、この映画は一見して癩患者と分かる人物を登場させていない。

この映画には少なくとも5人の癩患者が登場する。その5人とは、南島金浦集落に住む横川（準主役）、金浦集落の老人、金浦集落の宮田の息子五作、白砂島の桃畑の女、土佐のある村の名門堀口家の娘雪子である。横川は、村長によればこの村で「一番病気が重い」のだが、サングラスと軽い歩行障害が示されるのみである。金浦集落の祈祷所の老人は黒い帽子を被っており、横顔と背後の姿だけが現われる。また、桃畑の女は顔を明らかにせず、宮田の息子は頭と手足に包帯を巻き松葉杖をついた姿が横からのショットで示されるに過ぎない。そして堀口の娘雪子も、薄暗い土蔵のなかでその姿がはっきりせず、横顔で眼と鼻と頬が一瞬現われるものの表情は読み取れない。この映画を観た高野六郎は、変形した顔や手足の映像が現われないことをよしとして、次のように述べている。

画面には癩の深刻な形貌は殆ど出て来ない。顔をそむけなくともよい程度の軽症患者と面をあらはに出さない重い患者の身体の一部が時々示されるに過ぎない。（中略）癩の映画でありながら、…癩の陰惨さを余りしつこくは感じせしめない用意が行き届いて居る（高野 [1940：58]）。

もう一方の方策とは、美しい風景を多用することである。先に引用した太田の日記にも、「配景も佳なり」と書かれている。このレトリックは、小川の著作『小島の春』でも用いられているものである。第1節で示したように、『小島の春』の巻頭に掲げられている15葉の写真のうち13葉は美しい風景の写真なのである。

すなわち、これらの方策とは、醜いと感じられるものの映像の使用を可能な限り少なくすること、美しいと感じられるものの映像を可能な限り多くすることである。では、この映画で短歌はどのような役割を果たしているだろうか。

4. 短歌というフィルター

癩患者と短歌のかかわりを考えるとき、まず検討しなければならないのが、貞明皇太后（大正天皇の妃）の次の短歌である。

つれづれの友となりても慰めよ行くことかたきわれにかはりて

この歌は、1932年11月10日大宮御所で開かれた歌会で詠まれた（n.d. [1932：ページ番号なし]）。歌の意味するところは、行くことができない私の代わりに患者の友となって所在ない彼らを慰めよ、である。この歌会の兼題は「癩患者を慰めて」だった。時代を考えれば、御所の歌会でこのような兼題が選ばれたことに対して、出詠した45人のなかには驚いた者も少

なからずあったと思われる。この歌は、隔離を意味する救癩運動にかんするさまざまな文章に引用されるようになり、結果として癩救済運動のなかで大きな意味を担うことになる。

たとえば内田（[1938：214]）は、皇太后がこの歌を「御下賜遊ばされたので、患者の感激は言語に絶し、一般人士の救癩精神を鼓舞し」とする。そして、「患者の感激」は、癩予防協会がこの歌の下賜5周年を記念し、全国から募集した奉答歌と職員の奉答歌、すなわち「病人みとり人らの感激を新にしてよみ出でつる歌の数々」を集めて編んだ歌集『楓の落葉』のなかに見て取ることができる（[1937：ページ番号なし]）。

この歌集の巻頭を飾るのは、明石海人の次の歌である。

みめぐみは言はまくかしこ日の本の癩者と生れわれ悔ゆるなし

この歌が表しているのは、自己肯定とともに、癩にかかわる医療従事者の営為の肯定、すなわち最終的には隔離政策の肯定である。荒井（[2011]）は、この皇太后の御歌は、癩隔離政策を行なう者の正当性を担保していると指摘する。たしかに、自ら癩患者を「なぐさめ」に行くことのできない皇太后の代わりに彼らを「なぐさめ」るのは、癩にかかわる医療従事者ら救癩政策を行なう者たちなのだから。

大宮御所で開かれたこの歌会には、これとは別に重要な意味がある。それは、この歌会が、天皇家と癩患者たちの共同性を形成する契機となったことである。先に示したように、兼題は「癩患者を慰めて」である。皇太后をはじめ皇族や貴族が、癩患者という社会のマージナルな存在を視野に入れているのだと表明しているのである。内田（[1940：221]）は、次のように述べる。

家を追はれ社会と絶縁されてある彼等の、精神的に生きる道は全く塞がれてゐたが、文芸作品に依る社会との交歓は、漸く彼らに残されたる唯一の精神的更生の纜である。究極の社会との交歓は皇太后のこの歌にこたえることであり、その意思が『楓の落葉』に結実した。

話を〈小島の春〉へと戻そう。この映画に現われる短歌は、小川正子が詠んだもの（映画の数カ所に現われる）、観客は癩患者雪子作ととらえるもの（小山先生が雪子と面会する場面に現われる）、明石海人が詠んだもの（長島愛生園を写したシーンで現われ、音読される）である。小山先生という救癩政策（＝隔離政策）を行なう者と癩患者という隔離されている者（明石海人）、あるいは隔離されるべき者（雪子）は、短歌を詠むという点で同じ地平にたっているのだ。そして、映画に現われる癩患者である明石海人の短歌は、次のような感傷的なものが選ばれ、実際の長島愛生園の映像にスーパーインポーズされることによって、ドラマタイズされるのである。

盲ひてはおのれが手にはつくらねど庭のトマトの伸びをたのしむ

わが骨の帰るべき日を嘆くらむ妻子等をおもふ夕風ひととき

一首めは初句に失明という当時の患者に起こりうる事態が詠まれているが、二句め以降は和

やかな光景が描かれる。二首めは生きて妻子に会うことはないという諦観が、抑制されたトーンで示される。このような現実を淡々と詠んだ短歌を挿入することが、八木の言う「ドラマ的にも、また、生理的反発を避けるためにも、…有効な手段」である短歌の用法なのである。

太田（1940：57）は、この映画を観るものは「初めのうちは癩問題と云ふ事を意識するが、やがてそれは忘れてしまふ。『詩』の伴奏の下に活動し、揺曳する或る魂に参通するばかりである」と述べている。なるほど、短歌が挿入されることによって隔離する側と隔離される側の境界が曖昧になり、観る者は小山先生の純粋な行為—言うまでもないが、著者はそれを是としな—に魅了されるようにこの映画はつくられているのである。

結論

周知のように、日本の近代化とともにコミュニケーションのあり方は大きく変化した。本稿で扱った二つのジャンル、映画と短歌について簡単に触れておこう。日本で日本人によってつくられた映画は、それが初めて公開された1899年以来、順調に発達し大衆芸術としての位置を確かなものにしていった。

一方、短歌も大きく変容した。マスメディアの出現によって、それまで狭い範囲でしか流通していなかった短歌は多くの作者や読者を獲得するにいたる。松岡〔2011〕が指摘するように、1886年創刊の月刊誌『大八洲学会誌』の短歌投稿欄には全国各地から歌が寄せられたし、佐々木信綱が主催する竹柏会が1898年に創刊した日本で最初の月刊短歌結社誌『このころの華』にも、やはり全国から短歌が投稿された。この二つの活版印刷の雑誌が全国的に流通した背景には、新たなコミュニケーションの様式として導入された郵便制度が確立したことがある。

他方、1899年、正岡子規は、かつて自ら記者として活躍した新聞の『日本』誌上に投稿短歌欄を設けた。その後、石川啄木を選者とした朝日歌壇が1910年に始まり、いわゆる新聞歌壇が確立されるにいたる。郵便制度の確立や印刷技術の進歩に伴って出現したマスメディアによって短歌は大衆化されていった。それとともに、詠まれる対象も花鳥風月から生活全般へ拡大し、そのなかには病気も含まれるようになった。そして、療養短歌、すなわち癩や結核の療養所で患者たちが詠む短歌というジャンルが確立されたのである。

〈小島の春〉は、癩をテーマにした商業映画など想像もつかなかった時期に突如として出現した訳ではない。上述の商業映画の発展、短歌の大衆化と療養短歌の確立というコミュニケーションの変容のなか、1936年頃からの「癩文芸」ブーム、1938年に出版された『小島の春』がベストセラーとなったこと、そして国策としての「救癩」を啓蒙するという気運を背景として、この映画は出現したのである。

〈小島の春〉において、しかし、癩はその症状としての変形した顔や手足はスクリーンに現われない。そうではなく、社会から孤立した存在としての患者、長島愛生園のような療養所において救済される存在として表象されているのである。

1936年11月に結成された超結社の歌人団体である大日本歌人協会が1940年2月に出版した『紀元二千六百年奉祝歌集』には、内田守人の次の歌が収められている。

み恵みにもれし癩者のなほありと我は叫ばむこの年にして（大日本歌人協会：12）

「この年」とは、言うまでもなく紀元2600年つまり1940年を指している。そして「み恵み」とは国家からの救済、すなわち癩療養所に収容されることである。この救済は隔離する側と隔離される側の共同性にもとづいたものであり、その共同性を示すのが短歌なのである。そして、この共同性は〈小島の春〉にも貫かれている。

付記

本稿は、慶応義塾大学人類学研究会（2013年12月17日）、および医療・文化・社会研究会（2014年10月15日）における発表にもとづいている。すべての関係者に感謝するが、とりわけ鈴木正崇、宮坂敬造、鈴木晃仁の各氏の厳しく暖かいコメントに深謝したい。

注

- 1) ハンセン病患者の文芸作品をまとめたものに、『ハンセン病文学全集』全10巻（皓星社、2002～）がある。また、ハンセン病患者の手になる文芸作品の研究としては、たとえば、大内 [2008]、荒井 [2011] がある。
- 2) ハンセン病のかつて呼称である「癩」が、極めてネガティブなコノテーションを持っていたことは言うまでもない。そして、この疾患の名がハンセン病と改められたのは第2次世界大戦後の患者たちの運動の成果である。しかし、本稿が分析するのは小川の手記『小島の春』とそれを原作とする映画〈小島の春〉であり、以降敢えて「癩」という言葉を用いる。なぜなら、ハンセン病と呼び換えることによって、当時のそのようなコノテーションが捨象されてしまうからである。
- 3) 藤井 [2002～2003]、杉浦 [2004]、石井 [2010] など。
- 4) 光田健輔（1876-1964）は、日本の癩治療に大きな足跡を残した医師で、1931年長島愛生園園長の初代園長となり1957年までの長きに亘ってその職を務めた。現在、その業績に対しては毀誉褒貶相半ばする。
- 5) 小川正子については、清水 [1986]、山下 [2003] を参照にした。
- 6) ちなみに、癩予防協会は1952年に高松宮宣仁を総裁とする財団法人藤楓協会となるが、この協会の設立にあたって初代理事長になったのが高野である。
- 7) コンテキストから判断すると、内田の言う「中央の雑誌」は結社誌を指している。

- 8) この高野の歌集『銀の芽』は不詳。
- 9) 正しくは「慰廢園」である。
- 10) 当時から現在にいたるまで、短歌結社はその会員に配布する結社名と同名の結社誌を発行している。1939年当時の結社には、下村宏（海南）が参加していた佐佐木信綱率いる〈心の花〉、斎藤茂吉が席を置いた〈アララギ〉などがあった。

引用文献

- 阿部知二、小林秀雄、太田正雄、下村宏、本田一杉、高野六郎、内田守（座談会）（1939）
「癩文芸を語る」『改造』21（7）：160-169
- 明石海人（1939）『白描』改造社
- 青木文象（1940）「『小島の春』と短歌の世界」『映画評論』22（8）：59～63
- 荒井裕樹（2011）『隔離の文学—ハンセン病療養所の自己表現史』書肆アルス
- ベイトソン、グレゴリー（1986）『大衆プロパガンダ映画の誕生』御茶ノ水書房
- 藤井仁子（2002a）「可視と不可視のポリティクス—映画『小島の春』と総力戦体制下における〈癩〉の表象（1）」『UP』No.361：17～21
- 藤井仁子（2002b）「可視と不可視のポリティクス—映画『小島の春』と総力戦体制下における〈癩〉の表象（2）」『UP』No.362：13～17
- 藤井仁子（2003a）「可視と不可視のポリティクス—映画『小島の春』と総力戦体制下における〈癩〉の表象（3）」『UP』No.363：37～41
- 藤井仁子（2003b）「可視と不可視のポリティクス—映画『小島の春』と総力戦体制下における〈癩〉の表象（4）」『UP』No.364：25～29
- 藤井仁子（2003c）「可視と不可視のポリティクス—映画『小島の春』と総力戦体制下における〈癩〉の表象（5）」『UP』No.365：26～30
- 藤井仁子（2003d）「可視と不可視のポリティクス—映画『小島の春』と総力戦体制下における〈癩〉の表象（6）」『UP』No.366：17～21
- 石居人也（2010）「ハンセン病表象としての映画『小島の春』」黒川みどり（編）『近代日本の他者と向き合う』解放出版社：148-173
- 小林秀雄（1939）「『小島の春』」東京朝日新聞1月11日号
- 木下杢太郎（1939）「小川正子著『小島の春』」『東京日日新聞』3月20日号
- 木下杢太郎（1940）「動画『小島の春』」『日本医事新報』第935号（8月10日発行）：57～58
- 木下杢太郎（1980）『木下杢太郎日記 第4』岩波書店
- 松岡秀明（2011）「『こころの華』第一巻と歌にかかわる当時のメディア」『国際経営・文化研究』16（1）：106-91
- 光田健輔（1939）「明石海人の印象」『短歌研究』8（8）：156-157

- 村井紀 (2012) 「明石海人の“闘争”」 村井紀編『明石海人歌集』岩波書店：265～309
- n. d. (1932) 『昭和七年十一月十日御歌会御兼題詠歌集』癩予防協会
- 小川正子 (1938) 『小島の春』長崎書店
- 岡野久代 (1993) 「明石海人年譜」『海人全集 別巻』皓星社：468～493
- 太田正雄 (1938) 「新万葉集」『短歌研究』7 (4)：260-262
- 大内都 (2008) 「戦中期の「皇恩」とハンセン病者の文芸一序説」三宅晶子 (編) 『千葉大学大学院人文社会科学研究所研究プロジェクト報告書第156集『身体・文化・政治』』：23～40
- 中山良馬 (1984) 「『小島の春』出版の頃」西坂保治、河本哲夫、秋山憲兄 (編) 『日本キリスト教出版史夜話』新教出版社：83-85
- 成田稔 (2004) 『ユマニテの人－木下杢太郎とハンセン病』日本医事新報社
- Q (津村秀夫) (1940) 「小島の春」『東京朝日新聞』7月24日
- 清水威 (1986) 『小川正子と『小島の春』』長崎書店
- 癩予防協会 (編) (1937) 『楓の落ち葉』癩予防協会
- 下村海南 (1938) 「序」小川正子『小島の春』長崎書店：序5～序6
- 杉浦晋 (2004) 「『小島の春』試論一手記と映画をめぐる場の編成」『埼玉大学紀要』39 (2)：1-14
- 高野六郎 (1931) 「癩の根絶」『公衆衛生』49 (8)：41～50
- 高野六郎 (1940) 「『小島の春』評」『日本医事新報』第935号 (8月10日発行)：58
- 高野六郎 (1961) 『高野六郎歌集』新星書房
- 友田純一郎 (1966 [1939]) 「小島の春」『キネマ旬報別冊 日本映画シナリオ古典全集5』キネマ旬報社：82-83
- 内田守人 (1938) 「癩短歌の昔と今」『短歌研究』7 (9)：214-219
- 内田守人 (1940) 『療養短歌読本』白十字会
- 八木保太郎 (1966) 「若さの一つの記念」『日本映画シナリオ古典全集 第5巻』キネマ旬報社：63
- 山下多恵子 (2003) 『海の蠍』未知谷

Epicurean Children: On interaction and “communication” between experimental animals and laboratory scientists

Mitsuho Ikeda and Michael Berthin

(Center for the Study of Communication-Design: CSCD, Osaka University)

Index

1. “Cultural Physiology” of Natural Philosopher
2. Neurophysiology and Cultural Anthropology
3. The Field Settings
4. The Place and My knowledge, or My Place and the Knowledge
5. Laboratory as a Historical Entity
6. Animal Experiments and Their Verification Process
7. “Care” in situation of the hybrid
8. Concluding Remarks

Key words

Ethnography, Scientists, Experimental animals

— *Now the parts are obvious enough to physical perception. However, with the view of observing due order and sequence and of combining rational notions with physical perception, we shall proceed to enumerate the parts: firstly, the organic, and afterwards the simple or non-composite.* (Aristotle, *Historia Animalium* 491a)¹⁾

1. “Cultural Physiology” of Natural Philosopher

In the aftermath of the 3/11/2011 catastrophe, the Japanese state has evoked “*Kizuna*”(social bonds) and “*Anshin-Anzen*” (comfort and secure) society as renewed propaganda. The government and the relating agencies promote these ideas not only among social scientists but also natural social scientists in a new emerging collaborating arena for accomplishing these national aims. It is said, in the of promotion of science, that it has two aspects, one is strongly influenced by sociality like present Japan, in particular applied and social sciences, while the other is transcendent from the society, such as astronomy or high-energy physics. But our anthropological question is whether scientists can actually perform free from worldliness. Our paper demonstrates how experimental scientists make the real world with animals.

We discuss the relationship between humans and animals from the point of view that there is a sustained Japanese cultural ideology in the natural sciences, from basic academic philosophy to

applied drug design pharmaceutical industries. In other words we intend to represent their “cultural physiology (*physiologie de la culture*)” of Japanese natural scientists. For this purpose, we examine neuroscience laboratories that employ cats and monkeys in a Japanese university. Generally speaking, ordinary people do not know exactly how animals are used in experiments within such laboratories. Some Japanese animal rights activists have been escalating their demands for the protection of experimental animals; they call for public action. We can see such propaganda in some of the photographic panels, containing scenes from an unknown source and found in commercial arcades across suburban Japan, that explain the “cruelty of animal experiment in hidden laboratories.” Honestly speaking there exists grand moral conscious discrepancies between animal rights activists and the scientists who treat animals in laboratory.



Fig. 1 “*Dōbutsu Irē-Sai*” (memorial service for animal spirits in front of the Memorial Tower, at National Akita University, held in September 20, 2007. Cited from <http://www.med.akita-u.ac.jp/~doubutu/Default/ireisai/ireisiki19/ireisiki.html>)

In this paper we will discuss the hybridity between experimental neuroscientists and the animal themselves, as well as the interaction between them. This paper challenges the dichotomy between object and subject, the animals and the scientists, which are narrated into a pre-established harmony through children’s books or television programs on the quasi-national broadcast agency, NHK. According to our commonsense understanding, and regardless of the clear ethical issues surrounding research, natural scientists are thought to treat experimental animals as objects from which they extract data using various experimental instruments. We sometimes hold the stereotype that cold-blooded scientists treat experimental animals as “machines.” Their only concern is to analyze data, structure the “facts,” and, finally, glean “scientific truth.” But we have experienced the very ordinary life of the neuroscientists who feed the caged animals, conduct experiments, analyze the data, discuss their topical issues using their own data and the previous

studies, and attend their seminars. Needless to say the real ethnographic data complicates our stereotypes, and indicates that these scientists are not so coldblooded with experimental animals.

Because we take our point of view from the complete philosophical naturalism described by Phillip Descola (2006:8; 2013:179–185), we do understand the notion of “negotiation” between human being and an animal to be a metaphor, e.g. (*exempli gratia*), anthropomorphism, in the human cultural imagination not in their imagination of the animals. But we found that natural scientists do not completely treat experimental animals as material objects. Naturally we should take care in how we “use” animal. According to our juridical law and/or the code of ethics for scientists, it is strictly prohibited that we subject animals to more “pain than is necessary,” that means we are treating appropriately the life of animals. Some people treat animals as pets, while the scientists treat animals as living objects, “*Iki-Mono*.” We ourselves are not separated from animals in our logical or “cosmological” dichotomy between human and animal. Sometime humans are included as with animals; while at other times human are arbitrarily excluded from the category of “animals.” Human beings and animals are both co-evolutionary existences (Haraway 2008) in our post-modern era; we can use the new terminology representing both categories, as “negotiable existence” between human and animal. Reflecting our human natural history, we have spent over hundreds of centuries of hunting activities during the human evolutionary process, and therefore the relationship between animal and human being is that of predator and victim and/or meat and hunter. We have also brought them into a symbiotic “domestication process,” both domestication of animals and self-domestication by ourselves, and animals have given us meat, milk, skin and so on. Finally we have become intimate companions whereby animals are not only pets but also as experimental objects. In the contemporary situation, the experimental animals are potentially “invisible” even though we need them for the final test of pharmaceutical and biomedical industry and therefore scientific “progress.”

We need to develop an ethnographic examination of laboratories, and the way that animals are used, in order to gain further insight into the hidden “negotiation” between animals and human beings involved in such science. We present our case study of laboratory ethnography of the neurophysiology of the vision using rats, cats and monkeys as experimental animals (Ikeda 2012). The following sections present theoretical discussions on laboratory anthropology (Chapter II), the field setting of neurophysiology (III, IV, an V), the cultural production of scientific knowledge (VI), and the mystification of the disappearance of the boundary between scientists and animals that does not appear in scientific journals (VII). The final section concludes the nature of interaction and “negotiation” between animals and scientists.

2.

Neurophysiology and Cultural Anthropology

The academic discipline of neurophysiology has drastically changed undue to advances in both the behavioral sciences and new research in molecular bio-informatics. Our research interest is chiefly in “the social practice of scientists,” in other words the way that scientists behave in the actual places where science is born. Our premise is that scientists can be influenced by their ordi-

nary life or the ethos of their cultural milieu. And the scientist participates his/her game and solves the puzzle that the scientific paradigm is providing, according to the Kuhnian explanation explained later. And, as with the Kuhnian thesis (Kuhn 1996), scientists engage in the “game” of solving puzzles that their paradigm provides. In this sense, “social practice” is a synonym for the scientist’s way of life.

In this present study we are challenging the classical stereotype of the cultural anthropologist as an adventurer seeking exotic native people. For historical reasons, the classical anthropologist sought the exotic ‘Other’ who is completely different from people in “our” culture. Such an anthropologist stresses the exotic rather than similar, focuses on how we are different rather than on what we have in common.

The neurophysiologists who appear in this ethnographic study are the “objects” of our research. They are also colleagues in the university where we are working. In general we were fostered in the same Japanese modern urban and university subculture, but in other aspects we are living in different academic milieus. We are neighbors and our lives mirror each other’s. During our research period we are always trying to understand each other by talking openly, encountering that bit of difference that is always found in ordinary ethnographic work.

Here we return to our thesis of “social practice” that is reflected in the participant’s sociality, even at the isolated micro-level laboratory which is ostensibly separate from the ordinary macro-level society found in much sociology of science. Our first motivation in this study is to provide a case study in the anthropology of Japanese science. We also aim to contribute to a new and an alternative social role for science studies in the Post-Science-Wars era (Sokal and Bricmont 1998) whereby the social studies of science have been criticized as useless critique for the sake of critique or as a quest for esoteric entities in science.

Because one author had previous fieldwork experience at a field laboratory for tropical ecology in Costa Rica (Ikeda 1998), this ethnography seeks to build on this experience in a neurophysiology laboratory in Japan. Needless to say there are many great pioneers in the ethnographic study of science, especially in the experimental endocrinology laboratory. Latour and Woolgar highlighted the dynamic and contingent factors that intervened in the authorized knowledge building process of constructing scientific facts (Latour and Woolgar 1986:75). There are small numbers of the ethnographic studies in Japan (Knorr-Cetina 1981; Callon 1986; Treweek 1988; Coleman 1999).

More than seventeen years before Ikeda’s fieldwork in Costa Rica, he had worked for half year in a biochemistry laboratory studying circadian rhythm metabolism (Ishikawa et al. 1984). He encountered his colleague Sato who is one of the protagonists in the story of our paper. Today he is the professor of the neurophysiology laboratory. Ikeda has been consulting with Prof. Sato in order to realize this fieldwork since May 2005 when Prof. Sato was invited as lecturer for a university public seminar. He was willing to invite me as participant observer of his laboratory.

3. The Field Settings

The field site is one of numerous neuroscience laboratories in a Japanese university. The laboratory has a staff of one professor, one associate professor, one assistant professor, some postdoctoral fellows, and a number of graduate students and technicians. The laboratory is referred to as a “*Kyo-Shitsu*” (literally “classroom”) in common parlance or officially “*Shō-Kōza*,” (“small chair for lecturer”) the smallest institutional unit. Nevertheless the Deregulation of University Act, DUA, of the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology, MEXT, introduced at the end of March 2007, officially abolished this type of institution. Under the old regime before 2007, the nomination system for laboratories was still active so we would call this type of laboratory “Professor X’s *Kenkyū-shitu*” or “*X-Ken*.” In the laboratory, Dr. Hiromichi Sato, Ph. D, took his professorship chair in 1995 after transferring from the faculty of medicine of the same university. Dr. Sato had been the lecturer of the Biomedical Education Center of the same faculty. When he was promoted to professor and he became the “boss” of the neurophysiology laboratory, or “*Sato-Ken*,” Dr. Shimegi, Ph. D, was assistant professor, and later promoted to associate professor at April 2002. By order of the DUA, this laboratory, which had been in the department of general education and acted as an autonomous independent university organization, was transferred to the faculty of medicine in April 2007. This new laboratory is officially called the “Cognitive Behavioral Science Laboratory,” where they work on neurophysiological studies of the visual system of vertebrate animals. Still, the staff and neighboring faculty commonly refer to the lab “*Sato-Ken*.” After working as post-doctoral fellow for two years, Dr. Naito, began to work as an assistant professor from June 2005. In addition to these three tenured staff, there were one post-doctoral fellow and four post-graduate students. The gender balance much more heavily weighted towards men; only one staff member is female. This “inconvenient truth” can be observed in many natural science laboratories in Japan.

The laboratory is funded through competitive private and governmental grants including university offered running management costs, “*Daigaku-Kiban-Kenkyūhi*” (university-basement-research-grant) or “*Kōhi*” (official costs). But, due to the recent budget cutting trends from MEXT, the university scientists are now rushing to apply for a big, competitive governmental grant called “*Kagaku-Kenkyūhi Hojyo-Kin*” or “*Kakenhi*,” offered from the Grant-in-Aid for Scientific Research by the Japan Society for the Promotion of Science (JSPS). In 2012, the success rates of those grants were in the range of 17.2 to 30.0%. Trends in Research and development, R&D, expenditures as a percentage of GDP in Japan are comparatively high, 3.61% in 2006, comparing Korea 3.23%, US 2.62%, German 2.51%, France 2.12% in same year.²⁾

The most common activities at the laboratory include the maintenance of the animals in cages, a weekly seminar discussing recent publications called “*Shōdoku-Kai*” (“meeting for briefing papers” in literally meaning) or “journal club,” analysis of data and of writing papers for contributing academic journals, and animal experiments. In general the journal club is a very important activity for Japanese students because they have the opportunity to discuss and explain new scientific

trends and experimental methods, in Japanese, and therefore enter into “foreign advanced academic trends” in the transnational game of science (Sindermann 2001). In this laboratory every Saturday morning they discuss new topic in their academic fields for two or more hours. Research staff insist that the journal club is very useful not only for learning about new research trends but also as a pedagogic function: incorporating “young scholars” into “real academic talk.” Apart from the journal club, the “*Wakate*” on “juniors” who include undergraduate students, graduate students, and post-doctoral fellows have discussions based on their reading of textbooks. Prof. Sato’s laboratory, “Sato-Ken,” also maintains relations at least two others neuroscience laboratories on the same campus. This voluntary academic organization holds an annual meeting and sometimes holds an *ad hoc* seminar inviting the “*Ō-mono*” or “big name” that has visited to Japan.

We cannot omit another important (but unofficial) member of Sato’s laboratory. One undergraduate student of the faculty of engineering, Kaita-Kun (a nickname) was interested in the development of artificial visual devices for blind persons. He had participated with journal club during my research period. After having his time in animal experimentation at Sato’s lab, he was able to skip the faculty grade due to his talent he had graduated. Soon after he entered a graduate school of engineering. Different from the ordinary education route from undergraduate to graduate in the same faculty of the same university, this kind of recruitment of such “bypass” students is important for insuring a diverse laboratory. The present assistant professor Dr. Naito has a similar personal history. The post-doctoral fellows from this lab are highly encouraged to get involved in initiatives with other institutions outside of the campus. This self-training process out of their own incubator is called as “*Musha-Shugyō*” (literally “vagabonding quest for becoming strong Samurai”) by members.

Animal experiments are not only an ordinary part of laboratory activity, but also an important rite of initiation for newcomers. Because professors and other staff are often busy during the semester teaching classes, often the main experiments are conducted during vacation periods. For this reason, the staff refers to this season as the harvest season or “*Kaki-ire Doki*,” of animal experimentation. In this season quasi-formal “junior” members are invited to participate and/or observe “official” experiments that contribute to actual academic publications (as opposed to the “educative” experiments demonstrated in the university classroom). Animal experiments are divided into two types; (i) the acute experiment, in which data are collected intensively from the treated anesthetized animal by experimental apparatus, e.g., electrode potential probe, and (ii) the chronic experiment, in which the animals are trained with some behavioral task without anesthetization, and after this habituation, data are collected periodically for a comparatively long time.

Practicing and participating in animal experiments has two social functions for the members. One is to initiate new comers and the other is to make and sustain a “community of practice.” According to the theory of Legitimate Peripheral Participation, LPP, laboratory is a “community of practice” and novice participation is “situated learning” in the form of the LPP theory. The novice gradually comes to be involved in the “full participation” of expert learning (Lave and Wenger 1991). In this sense the laboratory can be a community of practice.

4. The Place and My knowledge, or My Place and the Knowledge

Dr. Sato is Ikeda's alumna of the graduate school of the medical sciences and also friend of his. They are the only two professors of their age group at the university. Therefore they are included in same "academic clan," *Dō-zoku* or *Gakubatsu*. When Ikeda talked with him to seek permission to conduct an ethnographic survey including interviews and participant observation with laboratory members, Sato guaranteed his position as a laboratory colleague. Ikeda has been interested in ethnography of the scientists for over fifteen years, and published his first ethnography of field ecologists in Costa Rica, entitled "Field Life: An Outline of the Survey on Micro-Social Activities of Tropical Ecologists" in Japanese (Ikeda 1998).

The classical anthropologists tend to eroticize natural scientists as "native people" that depend on their own "custom" or "culture." To avoid this type of exoticism anthropologists have recently taken a practical bent. Michael Gibbons' Mode theory is in this trend. According to Anglo-Saxon science studies, Gibbons (1994) specifies two modes with concern to this practical bent, "Mode 1 (one)" and "Mode 2 (two)," in scientific knowledge production. He defines the traditional or conservative scientific knowledge production processes as "Mode 1," in which the scientists objectify the material, "experimental animal" in our study, analyzes this material, and publishes findings in scientific journals. After the practical bent of the scientist, they think that scientific knowledge should be useful for solving specific problems in the real world. The latter is in "Mode 2." In the "Mode 1" sense, the anthropologist of yesterday was only interested in representing scientists as "native people," only concerned with representation without self-reflectiveness. But contemporary anthropologists in "Mode 2" seek to share their knowledge with the subject observed who wants to utilize "correct" knowledge.

Thomas Kuhn defined his "scientific paradigm" as "universally recognized scientific achievements that, for a time, provide model problems and solutions for a community of researchers" (Kuhn 1996:10). Because we depend on a Kuhnian theoretical point of view, we are interested in not only how biologists see experimental animals but also how they treat animals during their experiments according to their scientific "paradigm." In these motivations, we should note four brief scientific themes that the Sato's lab maintained.

Stimulus properties in the primary visual cortex and their mechanism. Context dependent stimulus regulation in the neurons of the primary visual cortex. Bottom-up and Top-down informatics of the vision, and Informational representations of the body receptive field and their mechanism.

As described in Latour and Woolgar's account of the endocrinology laboratory, the staff of Sato's lab sacrifice a great deal of time reading huge bibliographies of previous reports and writing and/or rewriting their papers depending on their own experiment data. More than teaching activities, these three professors spend their major time writing their own papers but also rewriting

and/or correcting other people's papers.

Even in famous Japanese national universities, there is more to academic life than the world of "publish or perish." Japanese university teaching staff divides own activities into three major parts, (1) Education, (2) Research, and (3) Administration. But today there emerges a fourth category, (4) Outreach for society, "*Shakai-Kōken*," literally "social contribution." They say that commenting and editing young researchers' papers is not only education but also the development of research activities at the same time. To publicize famously is also part of "*Shakai-Kōken*." Animal care generally can be thought of as demonstrative activity, but staff says that, in order to become good scientist, they should be good at animal care also. Professor Sato says all the activities of the laboratory are constructed for the total education of young scholars.

5. Laboratory as a Historical Entity

According to Kuhn (1996), in normal science, researchers dedicate their time to enthusiastically solving scientific puzzles. In solving these puzzles, they depend upon an epistemological framework that is the result of its own tradition in a certain historical context. It is clear that there exists a grand paradigm that is composed of smaller paradigms or sub-paradigms. In this study the grand paradigm might be the neurophysiology of the vision, which consists of sub paradigms in the "schools" as sub-divisions.

Thus the laboratory of the neurophysiology maintains some characteristics of its historical entity. The historical entity can be embodied or reified in her/his personal own experience. Dr. Sato, the counterpart in our dialogue of the scientists' stories, was not born as scientist but has become a scientist in Simone de Beauvoir's sense of on "*Ne naît pas scientifique, on le devient*" (Is not born scientist, one becomes it). We will depict the portrait of the scientists in the recent neurophysiology paradigm. Dr. Sato is a player of puzzle solving games.

The place of fostering in our story was the "Research Center of Higher Nervous System (RCHNS), the Faculty of Medicine, Osaka University," the socio-cultural space where mentors and disciples have been forging, "*Kitaeru*", each other. We will summarize the following information that we are indebted to in our writing of this paper: an extract of the description of the Neurophysiology section of the RCHNS in "[The 50 years Official Chronicle of Medical Learning of the Osaka University: Basic Science Laboratories & Research Centers Section](#)" (1978:289-294) that was written by Prof. Kitsuya Iwama, 1919-2010; the Preface of the Collected Papers which details the memories of Dr. Iwama, entitled, "[From Neurophysiology to Neuroscience](#)" edited by Dr. Takuji Kasamatsu (1985); Various interviews recorded with Dr. Sato; the web pages by Dr. Nigel Daw, the professor emeritus in ophthalmology and neurobiology at Yale University School of Medicine; and so on.

The beginning: After 1953 some core members of the Faculty of Medicine, Osaka University officially requested funding from the Ministry of Education, Science and Culture, "*Monbu-Shō*"

(former of the MEXT) to establish a research institute of brain sciences to t. One of the members was Dr. Toshiyuki Kurotsu, the Nobel Prize Nominee in Physiology or Medicine of 1952, who had been the professor of the Third Department of Anatomy. The establishment of the RCHNS was in 1961, one year before of the retirement of Prof. Kurotsu. Then he had chaired the RCHNS while also being a professor of neurophysiology. One year after Prof. Iwama, the former professor of physiology of Kanazawa University, had succeeded to the professorship of Neurophysiology of the center after Prof. Kurotsu. Dr. Kitsuya Iwama, sometimes mispronounced as “Kichiya” Iwama, was born in Miyagi prefecture in 1919. He graduated from the Faculty of Medicine, Tohoku Imperial University in 1943, two years before the decline of Japanese military empire. After his graduation he decided to become a graduate student of neurophysiology under professor of physiology, Dr. Kouichi Motokawa (1903-1971), the great pioneer of brain wave research and later the President of Tohoku University, 1965-1971. He decided to get into neurophysiology because Iwama was reluctant with the “illogical” clinical medicine of the day (Kayama 2010).

Dr. Iwama recalled in later years, “Motokawa Sensei (mentor) had verbal talent for explaining complicated matters with a few crisp words in his classroom that appealed to students very much. He -- Dr. Motokawa -- was always ready to discuss fresh ideas in research with us. He used to exercise fully his charm in talking to encourage young researchers in his laboratory. He loved simplicity” (cited from Kasamatsu 1985:i).

Dr. Iwama had been researching the brain waves during sleep in his Kanazawa’s days, but after arriving in Osaka he had begun to study cat “activated” sleep mechanism by introducing a built-in electrode, especially the pre-synaptic supposition mechanism of the Lateral Geniculate Nucleus, LGN, inside the thalamus of the brain. It is well known that the LGN receives information signals directly from the ascending retinal ganglion cells and then radiates a direct pathway to the primary visual cortex, V1 (ví one, in pronunciation). So the Iwama’s laboratory had begun to study the neurophysiology of the visual system of the brain during 1960s and 1970s.

Mr. Sato entered the master course of the medical sciences of the graduate school of Medicine of Osaka University in April 1980, when Prof. Iwama was 61 years old. Sato had just graduated at a famous private university in Japan with bachelors in experimental psychology. He had wanted to develop his carrier into neurophysiology. After being accepted to Iwama’s lab, assistant professor Dr. Kayama, an anesthesiologist who had graduated at a national university in western Japan, became Sato’s academic career master, “*Öben*” in old German-Japanese jargon in Japanese medical education sub-culture. After the death of Iwama, Dr. Kayama (2010) who is the former Professor of Fukushima Medical University wrote the obituary of his beloved mentor, “*Iwama-Sensei*” (Master Iwama), in the Journal of the Physiological Society of Japan, vol. 72(7-8). Sato had first published a small article with Dr. Kayama on the electrode recodes of Superior Colliculus, SC, in the rat brain in 1982 (*Jpn J Physiol* 1982, 32(6):1011-1014). In 1982, a year before the retirement of Iwama, Sato had consented to offer becoming assistant professor of Kanazawa University where Iwama’s disciple professor was working.

Some Japanese use the ironic term “[*Gaku batsu*] *Shokunichi Shugi*” (academic school clan) to refer to these nepotistic practices, especially for the “seven stars,” the ex-Imperial Universities in

post-war Japan. There were originally nine stars, nine “*Teikoku Daigaku* (Imperial Universities)”, or “*Tei-Dai*,” but now two in Seoul, South Korea and Taipei, Formosa have disappeared.

Anyway after two years “*Musha-Shugyō*” (the vagabonding quest to become a strong Samurai), Sato was called back to Osaka to work as an assistant professor again at the RCHNS in 1984. But Iwama had retired one year before, in 1983, the professor of the lab succeeded Dr. X who had agreed later with to abolish the research center and transfer to a new research center with more functioning educational services in 1987. Dr. X is now director of the neural plasticity research unit of one of the famous national research centers. After RCHNS was abolished, Sato had gotten a Ph.D. and took a post-doctoral position at Washington University in St. Louis, Missouri, United States. This meant he had another “*Musha-Shugyō*,” for two years abroad.

There was Professor Nigel Daw’s lab in Washington University. He, now professor emeritus of Yale University, was born in 1933 and got a Bachelors in 1956 and Masters in 1961 of Mathematics at Trinity Collage of Cambridge. From 1958 to 1961 he worked as a research fellow of Polaroid with the visual researcher Dr. E. H. Land and his colleagues such as Edward F. MacNichol, Jr. at the Marine Biological Laboratory, MBL, at Woods Hole, Massachusetts. They began to experiment with the retinal ganglion cells of goldfish. It is said that Land and the other staff at MBL were astonished by Daw who had constructed his hypothesis about the cell configuration of retinal ganglions of color sensitivity. Daw got his tenure position in Washington University in 1962 and worked for three decades until 1992 when he turned to Yale. His research interest was how the retinal ganglion information system treats colors and figure patterns. His research used cats, rabbits, and monkeys as experimental animals. During this period he received a Ph.D. in biophysics from Johns Hopkins University in 1967, and worked as a postdoctoral fellow in Harvard where David Hubel and Torsten Wisel were winners of the Nobel Prize in Physiology or Medicine in 1981. Daw worked with A. L. Pearlman and contributed to advance in the understanding of the mammalian visual system, especially the false belief that had cats could not perceive color. According to his thesis, cat’s color perception can be possible with a combination of the antagonistic colors in the LGN cells. He discovered that this hypothesis was verified by experiments of good trained cats. After the 1970s, he also contributed to the comparative study of the visual perception of animals that were trained in the environment where there is a one-way direction of running pattern. The visual developments of eye-deprived animals were also studied.

Sato has been to Daw’s lab in Washington University and became a postdoctoral fellow for two years. After two years “*Musha-Shugyō*,” he came back again to the same lab of professor X mentioned before; Sato worked again in the same university. Sato was promoted to a lecturer in 1990 when he was 34 years old. At the same year, Sato’s mentor in United States Dr. Daw became professor in Ophthalmology and Neurobiology at Yale University School of Medicine. Nine years later associate professor Dr. Shimegi of the Sato’s lab would visit temporally and participate with Daw’s lab. Mr. Shimegi graduated the graduate school of medicine, at Gunma University then got Ph.D. title in Medicine in 1991. At the same year he got the job of assistant professor of Osaka University. He had originally graduated at the faculty of education in gymnastic. He has a black belt in Judo and an M.A. in sports sciences.

Once, Sato's lab had belonged to one of the sections of the Department of Physical Education that included basic medical science for undergraduate students. One year after Dr. Shimegi arrived as assistant professor, Dr. Sato took a professorship, which was like "landing with a parachute" because the professor chair of this lab was assigned in the "territory" of the faculty of medicine. The faculty meeting had decided to assign Dr. Sato as a new professor of neurophysiology. Prof. Sato has promoted Dr. Shimegi to lecturer of his lab. Then Shimegi decided to change his research topic from gymnastic physiology to the neurophysiology of the vision. After three years of his "academic conversion," Shimegi published his first article of neuroscience in collaboration with Sato (J. Neurosci., 1999 19(22):10154).

The genesis of Sato's lab can be understood as "settler state building." After Sato arrived in the "new world" and encountered Shimegi, they cooperated mutually to develop a new department of neurophysiology. Sato had previous experience as a neurophysiologist, but Shimegi who just converted from the field of gymnastic physiology to neuroscience began at the bottom. The production of academic papers stopped for two years from 1997 to 1998 because they tried to construct Sato's lab the "fledged" research department. In these periods there was drastic change from faculty departments to graduate school in a series of "strong" national universities, especially of former imperial universities, which institutional reform style was named as "*Daigakuin-Jyūtenka*." It can be said that this institutional reform makes more disparities of budget and academic level grade than before. The Faculty of Medicine, "*Igaku-bu*," of Osaka University changed institutionally to the Graduate School of Medicine, "*Igaku-Kenkyū-ka*" in 1997. The latter institution has merged with departments of medical sciences of the same university and was changed to the Graduate School of Medical Sciences, "*Igakukei-Kenkyū-ka*" in 1998. The Sato's lab became a part of independent faculty of gymnastic education for undergraduate students, and the lab merged with the Graduate School of Medical Sciences in 2005.

Now we are back to February 2001 when Sato's ex-mentor of St. Luis, Prof. Daw of Yale spent a short time in Japan and gave a lecture at Sato's lab. In this seminar Dr. Shimegi encountered Prof. Daw and asked him to allow a short visit to Yale for animal experimentation. The motivation of Shimegi's visit was to learn the experimental techniques of Daw's lab. Sato and Shimegi wanted to introduce the methodological know-how of Daw's lab to Sato's. In terms of the collaboration with Sato and Shimegi, we have published their story of "their innocent abroad" in Japanese (Ikeda et al. 2008, Chap. 5). It is possible to see the animal experiment laboratory as an "incubate training unit" for junior scientists. After examining Shimegi's personal history in the U.S., we discovered the importance of Daw's laboratory tradition that Sato has succeeded in Japan. If we examine Sato's academic success, we finally found the importance of the Iwama's lab; finally we have just discovered the great tradition of Dr. Motokawa's lab, the great incubator of neurophysiology in history of Japan. It is clear that all the personnel mentioned above are not in only one school but they share various academic currents, *Gaku-Batsu*, if we can say, participants of a certain kind of the "scientific paradigm" of "sub-paradigm"

6.

Animal Experiments and Their Verification Process

The story that we detail above can be laborious for the readers who want to know briefly persons interact in animal experimentation. Nevertheless it is necessary background context for understanding the historical legitimation process of introducing animal experiments, because the treatment of animals is interrelated with the legitimation of scientific verification. In our case study the ethical legitimation of animal experimentation is rooted in the neurological physical and professional similarities with human beings (Ikeda 2012). As such, the researchers can insist on the applicability for human clinical treatments, especially for blind people and others with vision impairments.

If we do not understand this legitimation, the social situation will be open to the introduction of the opinion of radical animal rights activists who insist on complete abolishment of animal experimentation. Such activists want to liberate animals and free them from “torture.” “We do not believe that animal could be treated with any kind of “torture.” Stereotyped terminology, “torture,” is a rhetorical expression with anthropomorphism even though the natural scientists treat animals in preparation for experiment with anesthesia. Logically thinking it is impossible to make a subject “torture” under general anesthesia. Instead of this type of unproductive controversy, we should challenge to present the ethnographic point of view to understand how the “degree” of interaction between human being and animals being for understanding the common interiority and the communication between them and us.

On September 11th, 2001, the same date as the terrorist attacks, in the Yale laboratory 110km northeast of Ground Zero, Dr. Shimegi was working on an animal experiment that would contribute to his future paper entitled, “Blockade of cyclic AMP-dependent protein kinase does not prevent the reverse ocular dominance shift in kitten visual cortex” (Shimegi et al., 2003). As mentioned previously, once a scientist begins an acute animal experiment requiring of the skull, the researchers should take care of the animal under biological surveillance and continue to collect data until death. Dr. Shimegi had started his experiment before the moment of the tragedy of the 911. The experiment condition is very sophisticated and complicated. The animal should be awakened but not give pain by general anesthesia and muscle relaxant with an artificial respirator. Because the eyes of the animal should be open but not dried, they put contact lenses and eye lotion on the animal. After the experiment, the researcher immediately undertakes the euthanasia process so as not to prolong any “useless pain.” The dead body is treated very kindly because the researcher needs a whole brain substance for histological analysis (Histology is a sub-discipline of anatomy). The brain will be treated in staining for histological data collection. Nowadays the experimental animals are very expensive because of the genetic and medical qualitative conditioning. Before the experiment, the animal should be in not only good environmental condition but also medical well-being.

In summary the animals should be treated carefully in all periods of the experiment. The researchers observe carefully not only the neural level but also of whole body because it provides

important data for the experiment. Sometimes the animal rights activists stereotyped the scientist as a “diabolical sadist.” But according to our findings, the scientist has a “normal mind” and/or even has a “warm heart” in a different sense from ordinary people. Consequently the problem is how to represent the normal scientists’ mind-set maintains.

Occasionally we are easily led astray into the temptation to represent “our” scientists who use experimental animal as “our” native people in culturalist sense. But we are hesitant to eroticize the scientists because we, as researchers of researchers, cannot distinguish our exotic topic from their ordinary one. In any manner, they care for the animal’s heart and soul.

The scientist’s attitude toward animals is completely different from a pet lover’s blind love. The latter sense comes from the person’s own anthropocentrism and anthropomorphism. We sometime can observe the ultimate care spirit without humanistic feeling in a medical setting, e.g., the brain surgery operation room. Observing the fine operation of cat’s eye for making artificial exotropia (divergent strabismus) cutting the medial rectus muscle, the Sato’s personal writing on date July 20, 2001 says as follows.

The animal [cat] is generally anesthetized and operated under artificial respiration conditions. Always, the whole animal body is monitored by electrocardiogram, arterial oximetry, expiratory carbon dioxide gas monitor, thermometer, and respiration rate counter, and so on. In this time Dr. S.G. [pseudonym, a post-doctoral fellow of Prof. Daw’s lab] was “terrifically” sedulous and operated prudentially step by step. The operating room is sterilely clean. The numerous procedures are rigidly determined that I could not imagine which step had been the last one. Lastly Shimegi might have done this type of animal operation, but he could not master immediately when he encountered with this marvelous operation because he had been experimenting for rats only.”³⁾

The problem and its context are described below; it is well known that neural activity can recover functionally even after some part of the brain structure coincident with that functional role has been damaged. Some data suggests that functional compensation can be based on making new neural networks in the brain. It is possible that the alternative structural neural network was constructed to compensate for the damaged circuit. It is reasonable to assume that this neural constructing process might promote more efficiency for neural networks that are more needed and less efficiency for networks that are less needed. This biological adaptive process is known as “neural plasticity.”

Neural plasticity can be observed in the mammalian developing brain. It is said that the role of the glutamate receptor, which is called NMDA receptor coupling with glutamate as excitatory neurotransmitter, is very important. NMDA is an acronym for N-methyl-D-aspartate, and this type of receptor has high affinity with NMDA. If NMDA receptors existing around synaptic junction combine with glutamate, with the excitation of membrane potential the calcium ion flows into inside of cell as primer of the activation of enzymic system. The enzymic system, e.g. Protein kinase A (PKA), is activated and then the chemical synthesis begins.

They, Shimegi with Daw’s group, wanted to observe both the development of neural circuits

in typical plasticity and the neural action potential under the condition by micro pumping injection of both of the PKA. The PKA inhibits muscimol that inactivates neural activities for a while by blocking enzymic function. They focused if the reverse ocular dominance shift occurs under the dose of PKA. The reverse ocular dominance shift occurs normally under a dose of muscimol. (The ocular dominance will be explained two paragraphs later).

Why were they interested in this topic? If we want to know, we should understand Donald Hebb's law on neural plasticity and theoretical patch of the Hebbian theory that is called "covariance theory." Hebb's law is a kind of hypothesis that explains the plasticity using three points of view; (1) Cooperation, that synaptic plasticity can be formed under constant stimuli, (2) Input specific, that the significant synapse can be observed while the unrelated one cannot, (3) Association, that even weak stimulus with helping by other stimulus can make plasticity. The theoretical value of the Hebbian theory is the covariance theory, which explains the relations between plasticity and continuous reinforcing stimuli that depends on neural reinforcement of series of stimuli synapse by synapse. Needless to say they are not only interested in theoretical explanation but also in the molecular mechanism of the reverse ocular dominance shift when the neural plasticity phenomena occur.

For verifying their hypothesis, they used the artificial intervention for the reverse ocular dominance shift inside of the animal brain. Now we need more the knowledge of the difference between the ocular dominance shift and the reverse one. What is ocular dominance? - It is the tendency to prefer visual input from one eye to the other. The ocular dominance of neurons in the visual cortex of developmental critical period mammalian can be shifted by artificial operation, e.g., monocular deprivation (MD) or monocular inactivation (MI) by lid closure. This type of orientation process is not always singular but rather has alternatives. Normally the neural response has lost from the visual deprived eye's side, finally almost neurons respond to normal side in the developmental critical period animals. But in case of artificial inactivation of visual cortex, neurons have tended to response to more deprived eye side than normal one. The artificial inactivation of visual cortex can be made from the inactivation of neural inhibition even if there exists strong excitatory inputs to visual cortex. One example of the inactivation of neural inhibition is the continuous micro-infusion of the muscimol, one of receptor agonists of inhibitory transmitter the gamma-amino butyric acid, GABA, into the visual cortex. The combination between the inactivation of visual cortex and monocular deprivation makes the strange neural shift that looks like a functionally unnatural orientation, so there is shift from in the dominant eye toward the deprived one. This phenomenon is called reverse ocular dominance shift, as opposed to a normal ocular dominance shift.

Both normal and reverse ocular dominance shifts are phenomena that occur in the visual cortex after the retinal inputs are deprived at an ocular level. In addition to the monocular inactivation experiment, now they have another experimental method that investigates the two types of ocular dominance shifts through an operation based on artificially strabismus (squint). This experiment has pragmatic benefits not only for acquiring new knowledge of the mammalian visual system but also for surgery and its prescription for human squint patients. There are two major incentives for experimental scientists; (1) how the abnormal (strabismus) visual inputs affect to neural plasticity, and (2) what kinds of molecular mechanism will be selected. And they are interested in the timing

of the ocular dominance shift in the visual cortex correlating the operation for making artificial strabismus. So they should make the experimental roadmap of the combination operation of strabismus, observation of animal habituation process, and timing of experiment of the animals. Because of the terminologies of these experiments, e.g., monocular deprivation (MD) or monocular inactivation (MI), and the emotional reaction such names may elicit, it is understandable that they tend to use the acronyms MD or MI. But from the insiders' point of view they "sincerely" care for experimental animals

Shimegi who took the initiative for the experiment will be mentioned below. We will take our interpretation by retrospective perspective. Reading the Shimegi's first authored paper published two years after their experiments, we confront the two facts. We shall call, "Fact A" a macro level observation and "Fact B" a micro neurophysiological level observation. They have been constructed independently by their own data.

(Fact A)

Regardless of whether the Rp-8-Cl-cAMPS that inhibit PKA effect exists or is found, the normal ocular dominance shift occurs. Then the question is if the reverse ocular dominance shift is inhibited by the dose of the PKA inhibitor (Rp-8-Cl-cAMPS). The reverse ocular dominance shift is found in monocular cats if its cortex is continuously injected with muscimol that stimulates the GABA receptor that produces inactivation of the visual cortex. This question can be solved if the infusion of the PKA inhibitor is added continuously to the experiment mentioned above at the same time as Shimegi was planning. The result of this experiment is that the PKA inhibitor (Rp-8-Cl-cAMPS) does not prevent the reverse ocular dominance shift. Even if the Rp-8-Cl-cAMPS inhibit generally the protein kinase A (PKA) activity, the reverse ocular dominance shift occurs. It suggests that the PKA is not necessary for the reverse ocular dominance shift. This suggests the hypothesis that a different molecular mechanism between the normal ocular dominance shift and reverse one in the visual cortex can be observed in some critical period of the cat brain development. And it is possible that the normal ocular dominance shift occurs in the intracellular signal transduction system mediating with PKA on the one hand. But the reverse ocular dominance shift does not occur in a similar system.

(Fact B)

The reverse ocular dominance shift will occur with or without the existence of the Rp-8-Cl-cAMPS that blocks the function of PKA. The next problem issue centers on the neural activities inside the various layers of the visual cortex. There are six layers, from I to VI in the cat visual cortex. There is a strong tendency of ocular dominance shift in the layer IV that receives direct inputs from lateral geniculate nucleus (LGN). In the cat brain the visual inputs from both right and left eyes converge to a single neuron in layer IV of Visual Cortex (VI). The neuron begins to acquire the sensibility of both eyes inputs. But before this level of development the inputs from each eye are treated and transmitted separately from each other depending upon ocular dominant neurons. According to the data indicating that ocular dominance shift occurs mainly in layer IV, it is possible that the transformation of thalamocortical synapses in which the neurons project from LGN into VI area is a key phenomenon for the neural basis of the ocular dominance shift. At the same occasion there is information flow through layer IV to layer II and III, layer V to layer VI

successively. In this process the neural information according for strong selective ocular dominance shift with not only the deprived eye but also the normal one will converge, the reaction selectivity for deprived eye could weaken.

Shimegi concluded following below; (1) The activation of PKA is not necessary in the reverse ocular dominance shift process in visual cortex, and (2) The molecular mechanism of ocular dominance plasticity by eye deprivation is not a simple intracellular signal transduction but multiple. At least the normal ocular dominance shift that evokes in eye deprivation under the normal visual cortex's condition is not needed with PKA activation. Traverse ocular dominance does not depend on PKA but rather might depend on other molecular mechanisms.

We have reviewed the inside story of the Shimegi's first author paper in depth. At this point, we may wonder what the importance of this paper is for our overarching story. Can we understand it if we might study for both more his personal data and neurobiology in general? We think we cannot. We need basic information that can construct certain images of the scientific paradigm. We therefore seek to understand Shimiegi's paper in relation to Daw's text "Visual Development" (2006). Shimegi's thesis even exists in the Hebbian paradigm sphere because he does not intend to disputers Hebb's law but rather support and/or reinforce it. To understand Shimegi's paper requires not only collecting the scientific information on the topic but also knowing how they struggle with a series of enigmas and try to resolve their "puzzle." Because we are not specialists in this area, we take a shortcut method only to understand in the narrow actual scheme that they confront. This kind of study resembles a problem-based learning (PBL) whereby the students might seek a solution and alternative according single case study under the limited time and knowledge resource. Bu this method cannot give us the entire picture, a "holistic" view of their total activity. Like a long-term ethnographer with "native" people, we have to enter endless conversation with many neuroscientists.

7. "Care" in situation of the hybrid

In this section, we describe the hybrid entity between a human being and an experimental animal. We cannot use dichotomize between human and animal. In such a dichotomy, the human being can be interpreted as subject and the animal can be interpreted as object. We reconsider the behavior whereby neuroscientists collect data on an animal by an electrode infused in the brain. There is a fundamental antinomy when referring to "visual recognition in awakening condition" under anesthesia. Neuroscientists explain that an animal body can be in a state between "not sleeping under general anesthesia" and "awakening with conscious but without feeling pain." This is a state that we cannot imagine according to our own experiences. While not like a technical dilemma, it is a philosophical one. Neuroscientists overcome it logically by using a very sophisticated detective machine and their own experience with animals. It can be said that practical wisdom, *phronesis* in Greek, is useful for understanding how neuroscientists take care for experimental animals.

Before concluding the nature of care for animal by neuroscientist we begin to indicate the

discrepancy between the written description in a scientific journal and the actual behavior of scientists. In an academic article there is “method [of experiments]” section between the outline and the data sections. In general this “method” section details the methods of anesthesia and surgical operation, the presentation method for visual stimuli, the methods for detecting types of sensory neuron, methods of dissection, and the method of data analysis including mathematical theories and computer program packages. The citation of “Surgical preparation and recording” mentioned below is cited from the Journal of Neurophysiology issue from August 2008;

“We recorded extracellularly from V1 and/or V2 of eight anesthetized (sufentanil citrate, 4–12 $\mu\text{g}\text{-kg}$ [to minus first power] -h-[to minus first power]) and paralyzed (vecuronium bromide, 0.1 $\mu\text{g}\text{-kg}\text{-1}$ h-[to minus first power]) macaque monkeys (*Macaca fascicularis*). All procedures conformed to the guidelines of the University of Utah Institutional Animal Care and Use Committee. Animals were artificially respired with a 30:70 mixture of O₂ and N₂O. The electrocardiogram was continuously monitored, end-tidal CO₂ was maintained at 30–33 mmHg, rectal temperature was near 37°C, and blood oxygenation was near 100%. The pupils were dilated with topical atropine and the corneas protected with rigid gas-permeable contact lenses. The locations of the foveae were plotted at the beginning of the experiment and periodically thereafter, using a reversible ophthalmoscope. Supplementary lenses were used to focus the eyes on the display screen.[new paragraph] Single-unit recordings were made with epoxy-coated tungsten microelectrodes (4–6 M Ω ; FHC, Bowdoin, ME). Spikes were conventionally amplified, filtered, and sampled at 22 kHz by a dualprocessor G5 Power Macintosh computer running custom software (EXPO), kindly donated to us by Dr. Peter Lennie. Spikes were displayed on a monitor and templates for discriminating spikes were constructed by averaging multiple traces. The timing of waveforms that matched the templates was recorded with an accuracy of 0.1 ms. (Note, -1 is changed as [to minus first power])”(Shushruth et al. 2009:2070).

When I asked to Shimegi on the contents of this method, he said that “nobody could make” a the same successful experiment based on these sections because it says “nothing” about the “actual and detailed experiment.” In the laboratory there are a range of daily practices and complicated facts in how they anesthetized the animal, how they put out the cage to laboratory, how they weigh the animal, how they operated the respirator, how they calculated the volume of muscle relaxant, injected it, used the stereotaxic instrument, did the craniotomy operation, and injected delicately the electrode probe for detecting “cites” in the brain. These are monotonous routine procedures but they cautiously prepared each step to avoid any accidents with the measuring instruments that could result in a critical condition for the animal. Sometimes they call senior researcher in case of emergency. But nobody can predict the animal’s health condition and nobody can escape it. Apprentices should learn from senior researcher how accidents occur. This learning process of the on-the-job training (OJT) is very similar to legitimate peripheral participation (LPP) process learning in neuroscience laboratory as community of practice (Lave and Wenger 1991)

Scientist’s attitude toward animals can be understood as “thoughtful care for experimental animals” because we can observe the seamless and sophisticated procedure of bodily technique. We take one example here, “the collecting biophysical data without pain” in the neuroscience of the

vision. In this experimental method, the word anesthesia means physiological control. The animal was anesthetized in two ways, intravenously and from a respirator. On the one hand, if too much anesthetic is applied the animal has a disturbance of "consciousness" and the scientist cannot obtain "good" data from the animal. On the other hand, if not enough anesthetic is applied it will affect the metabolism of the "research object" (i.e. the experimental animal), and the researcher will detect various biological disturbances such as elevated blood pressure, increased heart rate and spontaneous neural responses apart from visual stimuli. Such results indicate that the animal feels "pain." In the case of these biological disturbances, the researcher stops collecting data. He tests how the anesthetization is going. And he monitors and checks biological and clinical data from animal body, even by simply pinching the skin of the animal to evoke "pain." At the same time, the researcher gently strokes the animal body as if he prays for the care of the animal fixed in its stereotaxic instrument. Needless to say we cannot know for certain how he feels toward an animal, but it does seem that he has compassion for animal beyond the relationship between experimental subject and object. Clearly he sought success in his experiment but he also confronted the obstacles when performing it. At that time he could separate his mind from animal as object. But when he confronted the animal's difficulty he transgressed easily the boundary between object and subject. All his motivations were oriented to the success of his experiment that explains why he cared gently with animal. Because he had his own pragmatic reason, he should recover with all his heart's and mind's strength. That is the reason why we suggest there is a hybrid entity between researcher and animal such that the researcher's care of the animal body is as if he is caring for his own body.

8. Concluding Remarks

It seems there is a difference between the anesthetic control of an animal and the efficient collection of neurophysiological data because we imagine that anesthetization is of secondary importance. It is simply an assistive technology to remove the "pain" for human surgical operation. But in this case the removal of the "pain" that the animal feels while keeping it awake and conscious is very important. In the animal experiment, anesthetic control is a key factor for success. Shimegi said this importance mentioned below,

"(A Japanese famous) neurophysiologist Prof. E (pseudonym) is one of collaborators of Prof. Sato, has mastered the perfect anesthetize techniques on cat experiments, of course! But he confronted the troubles to obtain the datum, never! for two years after arriving at his new university post, even he had transferred the same experimental machine set.. So there must be subtle differences in the complete same condition of the same experiment. It's a very 'delicate' thing!"

Back to the tradition on history of science and technology, the care techniques for experimental animals mentioned above is in a kind of genre of navigation or clinical technique whose characteristics are represented as conjecture or guesswork, contrasting with strict theoretical science. This is troublesome work that resembles the medical practice of the clinic. As Hippocrates had said, "I think we ought to admire the discoveries as the work, not of chance, but of inquiry rightly

and correctly conducted” (Hippocrates 1957[1923]:32)⁴⁾. In this time we change the perspective of the relationship between human being and animal, from the our new point of view of the hybrid entity to “interactive or negotiable agents.”

Today’s animal liberation theorists (e.g., Singer 2009) have not taken a kind of animal perspective position. Animal liberation is one of the key issues for talking about animal rights not only for lay activists but also for scientists. Sometimes this thinking is one version of philosophical utilitarianism. From a utilitarian perspective, they suggest the possibility of using of a “person” with mental disabilities instead of an “animal” based on the reasoning that the animal may feel more pain than the person. But utilitarian thought has another aspect for acceptance of animal experimentation that gives human welfare a higher priority than animal rights. The utilitarian main question has if the animal could suffer more than reason and talk. Jeremy Bentham described in 1823;

“The day may come, when the rest of the animal creation may acquire those rights which never could have been withheld from them but by the hand of tyranny....a full-grown horse or dog, is beyond comparison a more rational, as well as a more conversable animal, than an infant of a day or a week or even a month, old. But suppose the case were otherwise, what would it avail? The question is not, Can they reason? Nor, can they talk? But, can they suffer?”⁵⁾

The lawyers have taken great pain to control and not cause unnecessary suffering in animal experiments. In Japan we have the “Act on Welfare and Management of Animals” (Law number: Act No. 105 of 1973) comparing with the “Animals (Scientific Procedures) Act,” 1986 in U.K. and the “Animal Welfare Act” (Laboratory Animal Welfare Act of 1966, P.L. 89-544) in U.S.A. The Japanese act says in the section on “Method to Be Applied, Subsequent Measures, etc. in the Case of Providing Animals for Scientific Use”:

“Article 41 When providing animals for use in education, testing and research or the manufacture of biological preparations, or for any other scientific use, consideration shall be given to the appropriate use of such animals by such means as using alternative methods to that of the use of animals as much as possible and reducing the number of animals provided for such use as much as possible, within the extent that the purpose of the scientific use can be attained...(2) In the case where an animal is provided for a scientific use, a method that minimizes the pain and distress to the animal as much as possible shall be used, within the limit necessary for such use. (3) In the case where an animal has fallen into a state from which recovery is unlikely after being provided for a scientific use, the person who provided the animal for such scientific use shall immediately dispose of said animal by a method that minimizes pain and distress as much as possible.”⁶⁾

These laws were made by human beings and are not constructed for facilitating communication with animals. These laws represent the rules and norms of human beings as the patrons of animals. In this jurisprudence context there is no opportunity for negotiation between human being and animal. But if we relativize our own anthropocentric (homocentric) perspectivism and steer our perspective to the orientation of a hybrid entity between experimental animal and researcher under the human care object, we can observe that the scientists take not only the naturalism of the



Fig. 2 “*Jikken-Dōbutsu Irē-hi*” (memorial tower for experimental animal’ s spirits) The inscription was written by Dr.Taizō Ushiba, 1913-2003, Professor Emeritus of faculty of Medicine, Keiō-Gijyuku University, Tokyo. Cited from <http://bit.ly/1bug4Qa>

“modes of identification” of ontological relations (Descola 2006:2; Viveiros de Castro 1998). Even if it remains in anthropocentrism, Paul Nadasdy’s “the gift in the animal” is one of alternative interpretation of experimental animals (Nadasdy 2007). If we accept Nadasdy’s hypothesis of “the gift in the animal,” we can easily understand how the Japanese scientists who use animal as “sacrifice” attend the memorial service for the experimental animal spirits in front of the stone monument, inscribed “*Dōbutsu Irē-tō*” (memorial tower for animal spirits), once a year.

Talking of animal experiment and sacrifice, Japanese colleagues seem hesitant about “this kind of thing” and are concerned about protection from “animal rights activists.” The former attitude comes from Buddhist and/or animist *ethos*, the latter comes from actual administrative sense of human (not animal) rights. Japanese scientists tend to explain to laymen the significance of animal experiments. Animals are sometimes represented as master/teacher, bestowing the wisdom of the “nature.” In such a schema, the scientist is a disciple who is taught by animals. We note that that this cultural image on the relationship between animal and human being is completely different from the image of Kluane people of the Southwest Yukon, the life gift giver and taker (Nadasdy 2007:34–37). Also the Japanese image of the relationship between animal and scientist is different from Western image, between the object and the subject of the experiment. Here we do not insist on a cosmological difference between Japanese and Western scientific epistemologies of the type that have been popularized in various comparative theories in Japan. But we highlight the common characteristic on the relationship between master/teacher and disciple in Japan and Western world.

In the laboratory context, the relationship between researcher and animal can be interpreted as assigned between “care giver” and “care taker.” But at the same time the animal gives the wisdom of the nature to researcher. As such, the relations change to those between teacher (animal) and disciple (researcher). Symbolically if the participants will achieve success in the experiment, both wisdom giver and wisdom taker communicate frankly and exchange wisdom by the grace of nature. This relationship corresponds to a Greek concept, “*Parrhesia*,” that means “speak openly each other” or the transmission of technology. It is said that ancient Greek natural philosopher Epicurus suggested you do not say the truth depending on popular opinion but tell what you believe as oracle, Foucault once cited as;

“In investigation nature I would prefer to speak openly and like an oracle to give answers serviceable to all mankind, even though no one should understand me, rather than no conform to popular opinions and so win the praise freely scattered by the mob” — Epicurus, in *Fragments* one.⁷⁾

Clearly it is very difficult to find out the point in common of interiority of between human and animal that native specialists as shamans elaborate in animistic society. But modern scientific fiction proposes the common similarity of biological physicality between animal and human. In this conviction the scientist can extrapolate the animal fact to human one especially in neural calculation in their brain. The scientists organize the research team as micro society and they firstly communicate with animals and then secondarily communicate with humans of the other team. We cannot determine the actual *Parrhesia* relationship in which member can “speak openly each other” and transmit of certain kind of practical knowledge without participant-observation in the perfect air-conditioned and complete shielded laboratory.

— Nature proceeds little by little from things lifeless to animal life in such a way that it is impossible to determine the exact line of demarcation, nor on which side thereof an intermediate form should lie. (Aristotle, *Historia Animalium* 588b)⁸⁾

Notes

- 1) Aristotle, *Historia Animalium* 491a The History of Animals, Translated by D'Arcy Wentworth Thompson http://classics.mit.edu/Aristotle/history_anim.8.viii.html
- 2) Web pages on the analysis on the Grant-in-Aid for Scientific Research. http://www.jsps.go.jp/j-grantsinaid/27_kdata/9,2013(last viewed in July 10, 2013)
- 3) Translated from Japanese (Ikeda 2008:48).
- 4) Hippocrates 1957[1923]:32: Ancient Medicine, Hippocrates, vol.I, Translated by W.H.S. Jones, The Loeb classical library, Harvard University Press., 1957.
- 5) Bentham 1823 chapter 17, footnote #122 - Bentham, Jeremy. Introduction to the Principles of Morals and Legislation, second edition, 1823, chapter 17, footnote #122. <http://www.econlib.org/library/Bentham/bnthPML18.html> (last viewed in July 10, 2013)
- 6) “Act on Welfare and Management of Animals” (Law number: Act No. 105 of 1973) (source: <http://www.japaneselawtranslation.go.jp/law/detail/?id=61&vm=04&re=01&new=1>)(last viewed in July 10, 2013)
- 7) Epicurus, in “The stoic and Epicurean philosophers: The complete extent writing of Epicurus,

Epictetus, Lucretius, Marcus Aurelius." Whitney J. Oates. New York: Modern Library, p.41, 1940. See also "Discourse and Truth: The Problematization of Parrhesia(six lectures given by Michel Foucault at Berkeley, Oct–Nov. 1983)," downloaded from <http://foucault.info/downloads/discourseandtruth.doc>, (last viewed in July 8, 2013)

8) Aristotle, *Historia Animalium* 588bThe History of Animals, Translated by D'Arcy Wentworth Thompson http://classics.mit.edu/Aristotle/history_anim.8.viii.html

Bibliography

- Callon, M. (1986) Sociology of an Actor–Network theory, 1986 In *Mapping the Dynamics of Science and Technology*, Basingstoke: MacMillan.
- Coleman, Samuel. (1999). *Japanese Science: From the inside*. London: Routledge.
- Daw, Nigel W. (2006) *Visual Development*. 2nd ed., New York: Springer.
- Descola, Philippe (2006) "Beyond Nature and Culture," *Proceedings of the British Academy* 139: 137–155.
- Gibbons, Michael (1994) *The new production of knowledge: The dynamics of science and research in contemporary societies*. London: Sage.
- Haraway, Donna J (2008) *When species meet*. Minneapolis: University of Minnesota Press.
- Hippocrates (1957[1923]) Ancient Medicine, *Hippocrates*, vol.1, Translated by W.H.S. Jones, The Loeb classical library, Cambridge, MA.:Harvard University Press.
- Ikeda, Mitsuho (1998) *Field Life: An Outline of the Survey on Micro–Social Activities of Tropical Ecologists* (in Japanese). *Bulletin of Cultural Anthropology*, Faculty of Letters, Kumamoto University. No.2, 97–135.
- Ikeda, Mitsuho, Hiromichi Sato, and Satoshi Shimegi (2008) *An Ethnographic Study of Social Practice in Laboratory*. The Report on Grant-in-Aid for Exploratory Research by the Japan Society for the Promotion of Science, JSPS, Research Project Number:18650259. (Osaka University Library NDC: 361.6/IKE, ID:10301308697)
- Ikeda, Mitsuho (2012) Duality of Nature: Animals and Scientists in Japanese Neurophysiological Laboratories (in Japanese). *BUNKAJINRUIGAKU (Japanese Journal of Cultural Anthropology)* 76(4): 475–485.
- Ishikawa, T, M.Tamura, S. Nakamura, M. Ikeda, K. Nagai, (1984). Topographic analysis of the redox state of rat brain by NADH florescence photography of cross sections, *J.Biochem*, 95, 213–221.
- Kasamatsu, Takuji (ed.)(1985) *From Neurophysiology to Neuroscience: A festschrift for Professor K. Iwama*. Osaka: Priv. Pr.
- Kayama, Yukihiko (2010) Obituary Iwama Kitsuya Sensei. *Journal of the Physiological Society of Japan*, vol. 72(7–8), 183–185.
- Knorr–Cetina, Karin (1981) *The Manufacture of Knowledge: An essay on the constructivist and contextual nature of science*. New York: Pergamon.
- Kuhn, Thomas (1996) *The Structure of Scientific Revolutions*. Chicago: University of Chicago Press.
- Latour, B. and S. Woolger (1979[1986]) *Laboratory Life*. Princeton: Princeton University Press.
- Lave, Jean and Etienne Wenger, (1991) *Situated learning: Legitimate peripheral participation*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Nadasy, Paul (2007) *The Gift in the Animal: The Ontology of Hunting and Human–Animal Soci-*

- ality. *American Ethnologist* 34(1):25-43.
- Osaka University, Faculty of Medicine (1978) *The 50 years Official Chronicle of Medical Learning of the Osaka University: Basic Science Laboratories & Research Centers Section*. Osaka: Faculty of Medicine, Osaka University.
 - Shimegi, S., Q. Fisher, Y. Yang, H. Sato, and N. Daw (2003) Blockade of cyclic AMP-dependent protein kinase does not prevent the reverse ocular dominance shift in kitten visual cortex. *J. Neurophysiol.* 90(6):4027-32
 - Shushrush, S., Jennifer M. Ichida, Jonathan B. Levitt and Alessandra Angeluccia (2009) Comparison of Spatial Summation Properties of Neurons in Macaque V1 and V2. *J. Neurophysiol* 102: 2069-2083.
 - Sindermann, Carl (2001) *Winning The Game Scientists Play*. New York: Perseus.
 - Solal A. and J. Bricmont, (1998) *Fashionable nonsense*. New York: Picador.
 - Traweek, Sharon (1988) *Beamtimes and lifetimes : the world of high energy physicists*. Cambridge, MA. : Harvard University Press.
 - Viveiros de Castro, Eduardo (1998) Cosmological Deixis and Amerindian Perspectivism. *The Journal of the Royal Anthropological Institute*, NS, 4:469-488.

Communication-Design (コミュニケーションデザイン・センター紀要)

投稿規程

1. 投稿者の資格

- 投稿者のうち少なくとも1名は、大阪大学の教員・研究員、および学生を含むこととする。
- ただし、Communication-Design 編集担当（以下、編集担当）が承認または原稿執筆を依頼したものについてはこの限りではない。

2. 投稿内容・種類

2.1 投稿内容

- 投稿原稿の内容は自由であるが、広義のコミュニケーションデザインの概念・実践・教育方法の開発に寄与するものを対象とする。
- 原稿の対象は、論文、実践報告、研究ノートとする。

2.2 種類

2.2.1 論文（査読あり）

- 当該分野における新しい研究・開発の成果の記述で、研究の対象、方法、あるいは結果に独創性、創造性があり、かつ明確で価値のある結果や事実を含む。

2.2.2 実践報告（査読なし¹）

- 実践報告には下記のような内容を含む。
 - 教育、および社会学連携等の実践報告
 - 技術報告（設備・装置・ソフトウェアなどの設計・試験・運用・評価などの新しい経験やその結果の報告で、実用的価値のあるもの）
- なお、実践報告については、テキスト以外（画像・音声・映像等）を中心とした形式の投稿も可能とする。ただしその場合であっても、その背景や著者の意図に関する記述（1000文字以上）を含むこととする。

2.2.3 研究ノート（査読なし¹）

- 上記のカテゴリに当てはまらない原稿（下記の例示を参照）。
 - 短報（速報）：今後論文にまとめる予定の試論、又は速報的なもの。
 - 資料：論文のスタイルに収まりにくいもの。委員会・研究会が集約した意見・報告書など。
 - 編集者への手紙（letter to editor）：論文に対する意見、編集に対する意見など。
 - 書評：書物に対する評。
 - その他
- なお、実践報告については、テキスト以外（画像・音声・映像等）を中心とした形式の投稿も可能とする。ただしその場合であっても、その背景や著者の意図に関する記述（1000文字以上）を含むこととする。

3. 投稿原稿の作成及び提出

3.1 原稿の様式

- 原稿の様式は、別紙執筆要綱ⁱⁱによる。なお、編集担当において表記等をあらためることがある。

3.2 受理日

- 投稿原稿が編集担当に到着した日付をもって原稿の受理日とする。

3.3 内容

- 投稿原稿の内容は、原則として他の書籍・雑誌において未発表でかつ査読中でないものとする。

4. 査読手続き

4.1 査読の対象となる原稿

- 論文とする。
- 実践報告および研究ノートについては、編集の観点から修正を依頼する場合がある。

4.2 査読者の選出等

- 投稿された原稿について、編集担当が2名の査読者を選出し、別紙の査読要領にしたがって査読を行う。

4.3 投稿原稿の採否

- 査読の結果に基づいて編集担当が決定し、投稿者に通知する。

4.4 原稿の修正

- 査読照会事項について原稿の修正を行う場合は、旧原稿と査読所見に対する回答書を添えて、編集担当が指定した期間内に書類一式を再提出する。
- 著者校正は1回とし、再校以降は編集担当が担当する。

5. 著者校正

- 著者校正は1回とし、再校以降は編集担当が担当する。
- なお、マルチメディアの投稿原稿等については、配信上の加工が必要とされる場合、編集担当と著者との間で事前に協議することがある。

6. 媒体

- Communication-Design は、大阪大学学術情報庫（OUKA）を利用したオンラインジャーナルの形態で公開することを原則とする。

7. 著作権

- 本誌に掲載された内容については、投稿者に著作権があるものとする。
- また本誌は電子版も発行し、原稿は原則として大阪大学学術情報庫 OUKA に PDF ファイル又はその他の形式で掲載するため、著者はこれについての著作権上の複製権及び公衆送信権をコミュニケーションデザイン・センターに対して許諾することとする（これに掲載することを許諾しない場合は投稿時に申請するものとする）。
- また投稿において著作権者の存在する写真、図版、資料を引用する場合には、投稿者が責任をもって許可を得ておくこと。

附則

- この規定の改正は、2013年4月から施行する。

i 査読なしの場合でも、編集の観点から、原稿の改訂等を編集担当より依頼する場合がある。

ii 執筆要綱及びその他の書類は次の URL を参照のこと。 <http://cscd.osaka-u.ac.jp/data/orangebook/>

Communication-Design 12

異なる分野・文化・フィールド——人と人のつながりをデザインする

企画 大阪大学コミュニケーションデザイン・センター

編集・制作 三成賢次
本間直樹
西川 勝
内野 花
内田みや子

表紙デザイン 清水良介

2015年3月31日 発行

発行 大阪大学コミュニケーションデザイン・センター（CSCD）
〒560-0043 大阪府豊中市待兼山町1-16
Tel. 06-6850-6111（大阪大学代表） Fax. 06-4865-0121
<http://www.cscd.osaka-u.ac.jp/>

印刷所 能登印刷株式会社

© Center for the Study of Communication-Design and Authors. All Rights Reserved.

2015 Printed in Japan

本書における全ての著作権は、大阪大学コミュニケーションデザイン・センターとその著者に帰属します。無断転載を禁ず。

㊦〈日本複写権センター委託出版物〉

本書を無断で複写複製（コピー）することは、著作権法上の例外を除き、禁じられています。

本書をコピーされる場合は、事前に日本複写権センター（JIRC）の許諾を受けてください。

JIRC [<http://www.jirc.or.jp> eメール：info@jirc.or.jp 電話：03-3401-2382]

ISSN 1881-8234

